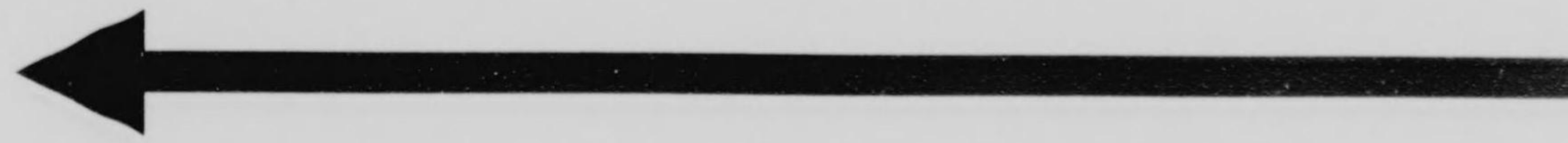


357
58

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始



35.7-58



テト
スト

坪内逍遙譯

大正
4. 6. 22
購求

THE TEMPEST.

ACT I. SCENE 2.

THE ENCHANTED ISLAND: BEFORE THE CELL OF PROSPERO.

PROSPERO, MIRANDA, AND ARIEL. ENTER CALIBAN

Prospero.

FOR this, be sure, to-night thou shalt have cramps,
Side-stitches that shall pen thy breath up; urchins
Shall, for that vast of night that they may work,
All exercise on thee: thou shalt be pinch'd
As thick as honeycomb, each pinch more stinging
Than bees that made them,

Painted by Henry Fuseli, R. A: Engraved by John Peter Simon.

縮言

「テムベスト」の公刊は、作者死後の二折本（一六二三年版）を最初とす、其以前には、曾て印刷に附せられし例なし。其創作の年は明かならざれども、種々の證左ありて、一六〇三年よりは早からず、一六一三年よりは晚からざるものゝ如し。その一六〇三年より早からざるべきは、此作中に、同年中にはじめて出版せられしフロリオ譯の佛人モンテーヌの論説が幾んど其儘に引用せられたるによ

りて證明し得らるべく、又その一六一三年より晩からざるべきは、此劇が、朝廷にて、同年の二月に、王子チャールス、王女エリザベス及び獨逸の司選侯フレデリッキの覽に供するのために、上演せられたりし記録あるによりて確めらる。按ふに、侯と王女との結婚を賀する祝典中の一餘興なりしならんか。劇中に、其頃最も上流社會に歡迎せられ、殊に朝廷の餘興としては缺くべからざるものゝ如くなれりし假面劇といふ劇を巧みに挿加し、且つ耳目に訴へて興あるべき装置及び趣向に工夫を凝らしたる跡あるなども、其一證なり。

加之、此作には、ある王子が溺死したるが爲に（實は助かりたるなれど）その父王はじめが之を悲める事と其王子と孤島に住める姫君との奇縁の結婚を慶賀する事とを、頗る念入に錯綜せしめて書き綴りたる趣見ゆるが、是れもまた事實に據あるものゝ如し。すなはち、王女エリザベスの兄にして、時の英王ジェームス一世の長子たりしヘンリといふ王子は、恰も同じ頃に夭折したり、而して王女結婚の際（即ち此劇の餘興として上演せられし際）は、尙ほ其服忌中たりしなり。作者が慶弔の意を錯綜せしめ且つ王子復活の件を挿みたるは、暗に王婿司選侯を

以て王子ヘンリの再生と祝賀し、王を慰めんとしたるにはあらざるか。司選侯がドーヴーの海峡を渡りて、遙かに獨逸より來れるなども、作中の王子ファーディナンドが、地中海を横斷して、アフリカを經由して、來り婚するの奇縁に似通へり。更に穿鑿を進むるときは、ジェームス王と此作の主人公プロスペロとの間にも多少の關聯あるものゝ如し。王は、當代に於ける最も博學なる君主として知られ、おのれもまた之を自負し、時の王侯中の「最も賢明なる愚人」*"the wisest fool"* と或史家に嘲られたりし程に、銜耀を事とし、随つてまた其敵人らの嘲侮を招きしことも屢、

あり。王は、種々の正しき法術に練熟したりし故に、邪法魔術を惡むこと甚しく、曾て魔女ウィッチと稱する魔法使ひの女等を嚴罰に處せしことあり。それらの事實を參照すれば、主人公プロスペロはジェームス王を理想化せるものと見做しがたきにもあらず。魔女シコラックスを惡み罵る口吻なども、何等か據りどころありげなり。沙翁程の作家が、よもや「最も賢明なる愚人」に阿諛はすまじき筈なりなど思ふは、おそらく後世の考ならん。國王の覽に供ふるために作られたりし劇には、コンプリメントの爲に、多少かゝる意味又は趣向を含ましむる例、其頃の作

には常に在り、沙翁の他の作中にも在り。當代の劇作者としては止むを得ざる務なりしならん。それはともあれ、これもまた此作の年代を一六一三年頃と假定し得べき一證なり。

此劇が、早くも一六一〇年以後の作なるべしと思はるゝ理由は、尙他にもあり。其一は恰も其頃（一六〇九年五月）にサー・ジョージ・サーマースといふが乗込める英國の一艦隊が、新世界の植民地ヴァージニヤに到らんとせし途中で、颶風の爲に散々となりて難破せし事實の存することなり。其際、提督の船は、「惡魔島」と呼びならはしたる

Bermudas 島に漂著し、九死に一生を得て歸國し、翌年（一六一〇年）該難船の顛末を「バーミューダス島の發見」と題したる小冊子に記して公報し、其事一時人口に膾炙せりといふ。此劇中に「常住颶風のバームーゼス」：“still-veered Bermoodhes”の句あるは、おそらく此事件を暗示せるものならん。内容よりいへば、此作の表題は、「妖魔島」又は「魔法師プロスペロ」などともあるべきを、單に「颶風」：“Tempest”として、劈頭第一に難船の舞臺面を以て幕を開けるなども、時好を迎ふる劇作家の慣用手段ならんか。次に、此劇中には、間々漂流者と新世界、外來の文明人と新開拓地乃至其

土蠻との關係を暗示せるかと思はるゝ文句も少なからざることなるが、彼のヴァージニア地方に於ける英の開拓事業が、漸く其功を奏して、該植民地の模様が、廣く其本國に知れ渡るに至りしは一六一二年以後の事なれば、此點より見るも、此作の著筆は、一六一〇年よりは早からざるべしと考へらる。

又、作者の同輩にして競争者たりしベン・ジョンソンが、一六一二年より一六一四年の間に作せし「バーソロミュー祭」と題したる劇の中に、暗に「テムペスト」の作意を嘲弄せるらしき文句あり。若し「テムペスト」が其頃の作ならずば、かゝる

暗刺も效なかるべき道理なれば、これまた此劇を一六一〇年以後の作とすべき一證となすに足らんか。其他、作の内容に仄ほのめかされたる作者の主觀及び其無韻律語フランクスの特徴などによりて察するも、此作は、彼の「シムペリン」、「ウィンターステール」、「ヘンリ八世」などと期を同うせる作品たること、幾んど疑ふの餘地なきものゝ如し。故に、今日にては、僅かに一二の異議を除けば、「テムペスト」を（假令之を沙翁の絶筆と見做さざるまでも）彼れが最晩年の傑作と見做すことは、沙翁學者間の輿論といはんも不可なし。而して、かゝる關係上より見て、此作はおのづから

一種別様の興味あり、随つて特殊の研究をも要すべき作なりとす。

此作の材源かと思はるゝものは、前に挙げたる「バーミューダス」島の發見中の難船の事蹟以外には、獨逸の劇作家 Jacob Agner の作に係る *Die Schöne Sitten* (美しきジデヤ) といふ一脚本あるのみ。アイレルは、十七世紀初期の凡庸なる一家にして、右の一作の如きも、恐らく古き英國脚本を改作したるものらしく、其英譯によりて察するに、多く論ずるにも足らざる作なるが、其筋の上には、幾分か「テム

ペスト」と相似たる節々無きにあらず。例へば、主人公のルードルフ公が妖術使ひなる事、ルンシファルといふ一妖精を使役しをる事、其獨り兒にジデヤといふ美しき姫ある事、且つ公の競争者もまた公爵にして、其公子と右の姫との間に戀愛關係の成立つに至る事あるが如き、是れなり。全篇五幕より成れるが、序幕はルードルフ公と其競争者ロイデガスト公との間の戦争にはじまり、ルードルフ公は敗績して其女と共に森林中に隠れ潜む。そこにて妖精ルンシファルを呪文を以て呼び出すことあり。(此妖精は、トガキに惡魔とあり、又姫が之に逢ふことを怖るゝこと

などあるによりて察するに、當時の劇に普通なりし常套的の悪魔役なりしならん。妖精は公の間に應じて、公が未來の運命を語り、其敵公爵ロイドガストの公子エンゲルブレヒトといふが、近きうちに捕虜となるべきことを豫言す。其次の幕には、ロイドガスト公が、其公子等と共に、此森林中に狩獵を催す件あり。公子エンゲルブレヒトは、其侍士某のみを伴ひて、誤つて途に迷ひ、圖らずもルードルフ公と其女とに邂逅す。公すなはち公子主従に降服を命ず。公子等拒みて、劍を抜かんとす、公其魔法杖を揮つて之を制し、彼等の劍をして其鞘を脱する能はざらし

む。かくて公子の手足を麻痺れさせて、ジデヤ姫の奴僕となし、姫の爲に丸太材を運搬せしむ。姫も其初めは父と心を同うし、舊怨を報ゆるに専心して、公子を遇すること酷薄なり、然れども次第に公子が風貌の優美に動かされて、其勞苦を痛ましがり、君もし吾れを愛したまはゞ、吾れ父に背きても君を救ひまゐらせん、願はくは吾れと婚することを諾したまへと説き、遂に互ひに契約をなし、父公の目を忍び、二人手を携へて出奔す。此際妖精ルンシファル躍り出で、吾れ此事を父公に告ぐべしと罵る。姫すなはち父の魔法杖を揮つて其唇頭を打

つ。ルンシファル忽ち啞となる。かくて二人は或山中まで落延びしが、姫は甚しく疲憊して、最早一步も運ぶこと能はずと歎く。公子は父公の追手を憚りて、姫を或る樹梢に攀ち登らせて隠しおき、程なく迎へに来るべきを約して、おのが館へ歸り去る。やゝありて近村の男女等此樹下を往來す。小河に映れる姫の影に駭きて、或者は之を父公に密告し、或者は、姫の乞に應じて、姫を樹梢より助けおろし、父公の尋ね來らざるに先だちて、伴ひ去る。之より先、公子エンゲルブレヒトは、其館に歸るに及びて變心し、他の一少女と婚を約して、全く姫の事を閑却す。

姫、賤婦に假裝して、公子が館に入込み、そしらぬ振して婚儀の席上に臨み、不思議の藥劑を公子に薦む。公子何心なく之を服するに及びて、忽然として我れに復り、姫を樹上に棄て殺しにせしことを回想し、深く先非を悔むの餘り、劍を抜きて自殺せんとす。姫之をとめて慰諭し、且つ假裝を脱ぎて本體を現はし、吾れ未だ死せず、心を安んじたまへといふ。此時、双方の父公爵も同じ館に會合し、其子等の爲の故に舊怨を解きて、二人を結婚せしむることを諾し、めでたく圓滿なる和局を結ぶに至る。

以上をアイレルが作の梗概とす。筋立の輪廓には幾分か「テムベスト」と相觸るゝ所なきにもあらねど、劇詩としての組織及び内容よりいへば、二者は全く別格の作たること明かなり。先づ、其著想の根柢に聯絡すべからざる徑庭あり、事件も脚色も空氣も情調も人物も、截然として別様の物たり。疑ふらくは、古き英國の脚本中に、双方の種本となりし作ありて、沙翁も、之に何等かの暗示を得て「テムベスト」を立案し、アイレルも、それに原もときて「美しきジヂャ」を作りしにはあらざるか。蓋しアイレルは、「テ

ムベスト」創作の數年以前、即ち一六〇五年に世を逝りたれば、沙翁の此作に負ふ所のあるべき筈なく、沙翁もまた（假令アイレルの此作が、或は旅俳優などによりて英國に逆輸入せられをりきとするも）彼れは獨逸語を解せざりし故、竟に之を讀むの機を得ざりしならん。

「美しきジヂャ」以外には、「テムベスト」の材源らしきもの、未だ一も見出だされざりき。一時、古き民謡中に類似の作意あるを發見して、沙翁學者中、或はそれを全くの種本と鑑定せし者もありしが、後に右の民謡は「テムベスト」以

後の作なること明かになりしため、其説も廢すたれたり。

此作は、之を實演用のものとして見るも、又現に實演するも、明かに沙翁劇中の最も優秀なるものゝ一たるも、今は異論なき所なれども、十七世紀に於ては、時の劇作家及び劇通等の此作に對する批判は、明治初期の演劇改良家等の老近松若しくは默阿彌の作に對すると、少くとも其詩眼に於て、相似たるものありき。すなはち、沙翁は荒唐無稽として貶せられ、もしくは野卑陋俗として排けられたりし結果、之を上演せんには多少の改作を

經ざるべからざるものとせられたり。此故に、彼の「アントニーとクレオパトラ」の如きも著しき添削を経て後に興行せられたりき。併しながら沙翁の作中、後の凡庸作者の改作に穢すされたること、此作より甚しきものはあらず。十七世紀の英の詩人ドライデンは、時の桂冠詩宗にして一代の巨匠と持囃されし作家なるが、劇の作者としても當時の第一流にして、其創作に係るものも甚だ多きが、沙翁の改作家としては羨ましからぬ名を後世に傳へたり。「テムベスト」を「妖魔島」エンチャントド・アイランドと改題して、デーヴナントといふ者と共に其改作に従事せしは彼れなり。「アントニーとクレオパト

ラ」を翻案せしも彼れなり。ドライデンの手を経たる「テムベスト」は、一言にして評すれば、詩を化して散文となせるものに外ならず。然るに此改作のみが一時は行はれて、沙翁の作が其儘に復活さるゝに至りしは一七五五年以後の事なりとす。

「テムベスト」は、其音樂の利用に豊かなると其視覺に訴ふる趣向に富饒なるとの故に、割合に早く歌劇に轉作せられたり。すなはち、一六七三年ロンドン市ドオセット・ガーデンズにて興行せられしもの是れなり。シャドエルといふ者の適用

したるにて極めて幼稚なる歌劇なりしなり。次は一七五六年ドルリレーンに於ける名優ガーリック一座の興行なり。此適用脚本はガーリック自身の筆に成れりきと傳ふ。蓋しガーリックの如きすら、其頃までは、沙翁が原作のまゝにては人氣に適すまじと思惟せるらしく、其以前（一七四七年）普通の劇として之を演せし際にもドライデンの改作に據りたりしなり。前にいへる一七五七年の原作復活は、同じくドルリレーンの興行なるが、俳優も同じくガーリックの一座なり。此興行も失敗に了りきといふ。「テムベスト」の舞臺に於ける成功は十九世紀以後の事なり。

大正四年二月中旬

譯者識

登場人名

アロンゾ、ネーブルス王。
セバスチャン、其弟。
プロスベロ、ミランの正統の公爵。
アントニオ、ミランの公位を篡奪せる其弟。
フーディナンド、ネーブルス王の子。
ゴンザロ、正直なる老顧問官。

アドリヤン、
フランシスコ、

ネーブルスの貴族。

カリバン、野蠻にして醜怪なる奴隷。

トリンキユロ、ネーブルス王の幫間役。

ステファノ、酔へる膳部方。

船長。

水夫長。

水夫等。

ミランダ、プロスペロの女。

エリエル、空靈なる妖精。

アイリス、

シリリス、

ジュノ、

水の女神等、

草刈男等、

妖精等の扮せるもの。

プロスペロに侍事せる他の精霊等。

場所。海上の船。孤島の諸方面。

テムペスト



幕

海上の船中。暴風雨。雷電。

船長 せんちやう 水夫長！

水長 こゝです。どんなですわね？

船長 おい、水夫等にさう言つてくんない。一生懸命にやれッて。うつかりする

と乗上ツちまはア。しつかりく。

船長入る。

水夫等出て来る。

水長

こらく、兄い達、やツつけるよく！ しつかりく！ 絶頂のを下す

んだ、絶頂のを！ 船長の金笛を間違へるな！……

水夫ら入る。

吹けく、息が切れるまで、海の積さへあるなら！

ネーブルス王アロンソ、其弟セバスチヤン、ミラン公爵アントニオ、王子ファ
ーザナンド、王の老顧問官ゴンザロ、其他出て来る。

王

こりや、水夫長、よいか？ 注意をせい。船長は何處にゐる？ しつかり

やつてくれ。

水長

どうぞ、船室にいらしつて下さい。

アント

船長は何處にゐるのだ？

水長

船長が然う申上げたぢやありませんか？ 仕事の邪魔になりますよ。船

室に入つて、下さい。暴風の手傳ひをなさるやうなもんだ。

ゴンザ

まアさ、静かにしなさい。

水長

海が静かな時ならばね。彼方へく！ 風や雷は、王さまだらうが、何だ

らうが、關ひませんからね。船室へく。黙つてく！ 邪魔をしちや

不可せん。

ゴンザ

大切なお方をお載せ申してゐることを忘れちやいかんぞ。

水長

自分より大切な者は有りやしませんや。貴下はお大臣さんだつてね。若

し貴下の號令で以て此浪や風が鎮ツちまふもんなら、わツしら最早二度と

は綱を扱やしません。やつて御覽じろ。が、もしそれが出来なけりや、今

まで生きたのを有難かつたと神さまにお禮言つて、船室へ引込んで、いざ

といふ時の覺悟をしておいでなさい。……兄い達、しつかりく……え、退いて下さいといふに。

水夫長 入る。

ゴンザ

彼奴は大きに予の心を慰めをる。水に溺れて死にさうな面附はしてをらん。彼奴の人相は、慥かに絞罪臺面ぢや。あゝ、運命の神よ、お豫定通り、奴をば縊首往生をおさせ下さるやうに！ 奴の宿命が繩と確定つてゐれば、その繩が取りも直さず吾々の碇綱ぢや、このはうのは當にならんから！ が、萬一此鑑定が外れると、情ないことになる。

ゴンザ 入る。

水夫長 又出て来る。

水長

絶頂のを下すんだ、絶頂のを！ しつかり。もつと下げろ！ もつと下げろ！ 大帆でやつて見ろ、大帆で！ (奥にてわアと叫ぶ聲) 畜生、又わめきやア

がる！ 風雷や號令よりも大きな聲をしやアがる。……

セバスタヤン、アントニオ及びゴンザロ 又出る。

又ですかい？ 何の用がありますよ、爰に？ わつしらに働くのを止めて

溺死人になれツてんですか？ 海へ潜込みたいんですか、貴下がたは？

セバス 其舌の根腐ツちまへ、此口やかましい、罰當りの、舌長の、犬畜生め！

水長 ぢや御自身でおやんなさい。

アント 畜生、絞りにされツちまへ、無禮な穢しい、やかましやめが！ 吾々は、

汝のやうに、溺死するのを怖つてはをらんぞ。

ゴンザ 予が保證します、あの男は決して溺死はしません、よしんば船が胡桃の殻

よりも脆からうとも。

水長 (水夫らに) 船をおツつけろ、おツつけろ！ 帆を二枚かける、沖へ戻すのだ、

沖へ。押出せ！

此時大きなすさまじい音響が聞える。水夫等すぶ濡になり
て出て来る。

水夫等 だめだく！ 最早お祈りだく！ だめだく！

水夫等入る。

水長 え、最早だれの口も冷くなつちまはんけりやならねえのか？

ゴンザ 王も王子も、只今お祈りの最中ぢや！ 吾々もお手傳をしよう、御同様の
境遇ぢやから。

セバス もう堪忍がならん。

アント 醉漢共の爲に、まるで欺し討にあつたやうなものだ。……（水夫長に）此阿呆
面の碌でなしめが！……汝のやうな奴は、十日間も潮洒しにしておいてく
れたいわい！

水夫長入る。

ゴンザ いや、彼奴は絞り首になります、よしんば海水が擧つて彼れの溺死を誓う
て、奴を吞まうとて、如何様に口を開きませうとも。

此時奥にて騒しき物音が聞え、「助けてくれ！」「船が裂ける！
船が裂ける！……」「さらばぢや、妻よ、子よ！」「さらばぢや、弟！」
「船が裂ける、船が裂ける！」など、叫ぶ聲が聞える。

アント みんなが王と御一しよに沈みませう。

アントニオ入る。

セバス 王に暇乞をしよう。

セバスチヤン入る。

ゴンザ かうなると、海は幾萬坪でもくれてやるから、荒地をたつた一段でも貰ひ
たいわい、長いヒースや鳶色のエニシダの生ひ茂つてゐる荒地でも可いか
ら。天の御意ならば是非に及ばん！ けれど成らうことなら陸で死にた



い。

ゴンザロ入る。

第二場 孤島。プロスペ

ロの窟の前。

プロスペロ及びミランダ出る。

ミラン
父上さま、あなたの法術で水
があつたやうに騒ぐのなら、ど
うぞあれを鎮めて下され。
浪が大空の頬を拍つて、あの

光つてゐる火を消さなければ、今にも眞黒な臭いものが天上から降つて
来さうぢや。あゝ、あの苦しむのを見てゐたので、わたしも一しよに苦み
ました！ あの見事な船……きつと、何か立派な者が乗込んでゐたであら
うに……みんな粉砕になつてしまつた！ あゝ、あの叫聲でわたしの此胸
が痛うなつた！ 可哀さうに、みんな死んでしまつたのぢや！ 若しわた
しが強いく神さまなら、あのやうな立派な船や乗組を海に吞ます前に、
海を干涸にしてしまつたものをなア！
プロス 騒ぐな。もう騒ぐことは無い。安心してゐなさい、何の事もないのぢや。
ミラン あゝ、悲しやく〜！
プロス 何の事もない、女よ、みんな其方の爲を思つてしたのぢや、何にも知らぬ
女よ、……わしが何處から来たかも知らず、また此見るかげもない窟の主
人プロスペロたるよりは身分の高い父ぢやとも知らぬ女よ、……みんな其

方の身の爲を思うてしたのぢや。

ミラン

わたしはそれを知らうとも思ひませなんだ。

フロス

今それを知らず時が来たのぢや。手を貸して此法服を脱がしてくれ。……

ミランダ 手傳ひて法服を脱がす。

さう。(服を傍に置いて) 法力よ、そこに休んでをれ。(ミランダに) 目を拭いて機嫌をなほしなさい。あの怖しげな難船の有様に、深い惻隱を覺えたのも道理ぢやが、あれは豫め法力を以て、予が如才なく手配りをしておいたによつて、泣叫ぶ聲が聞えて、沈むのまでも見えなければ、乗組の者一人として、只の一人も、いや、頭髮一筋さへも無くなりはせぬ。下にゐなさい、話すことがあるから。

ミラン

あなたは幾たびも、わたしの身の上を、話さうとしてはお止めなされました、さうしてわたしが問はうとすると、いつも「待て、まだ時が来ぬ」とおつ

しやりました。

フロス

其時が今来たのぢや。よう耳を開けて、わしの言ふことを聴きなさい。

其方は此窟へ来た前の事を覚えてゐるか？ よもや覚えてはゐまいなう、満三歳にもなつてはをらなんだから。

ミラン

いゝえ、ちやんと覚えてをります。

フロス

どうして？ 家か人かに記憶があるか？ 何でも可い、覚えてゐるものを

ば言つて見なさい。

ミラン

遠い前に……分明とは覚えてはゐませぬけれど……夢のやうに……四五

人の女の人が、わたしに附添うてはゐませなんだかえり。

フロス

四五人どころか、もつと附添うてゐた。どうしてそれを覚えてゐるぞり。

何かまだ他に、深い昏い来し方に見えるものは無いか？ こゝへ来ぬ前の事を覚えてゐるなら、どうして爰へ来たかも覚えてゐさうなものぢや。

ミラン それは記えてをりませぬ。

ブロス 十二年以前には、ミランダよ、十二年以前には、其方の父はミラン國の公爵で、威勢の盛んな君主であつた。

ミラン 貴下がわたしのお父様ぢやありませんかえり？

ブロス 貞女の模範と稱せられてゐた母親が、其方を女と呼んでゐた。また其方の父は、ミラン國の公爵で、其世嗣の一人子は、筋目の正しい姫君であつた。

ミラン おゝ、ま、思ひがけない！ さうして如何いふ不幸で、如是な處へ來たのでござりますか？ それとも來たのが幸福なのでござりますか？

ブロス 幸福でもあり、不幸でもあつたのぢや。其方の言ふ通り、不幸で本國を逐はれたのぢやが、幸福にも此島へ流れ着いた。

ミラン あゝ、此心が裂けるやうぢや！ 記えてはゐぬけれども、嗚其時父様に御苦勞をかけたであらうと思ふと！ どうぞ其後を聞かせて下され。

ブロス 予には弟、其方には叔父のアントニオといふ者……よう聞いてゐようぞ

……不義不信の弟め！……其方を除けては、又となく寵愛し、一國の政治をさへ任せておいた弟……其頃侯伯の領國數ある中にも、ミランは第一の大國であつて、ブロスペロは公爵の筆頭、威權はもとよりの事、學問藝術の嗜みとても並ぶ者はないと讃められてゐたので、政事向の事は悉く實弟に任せ、漸々國事に遠ざかつて、専ら秘密の研究にばかり心を奪はれ、おのれを忘るゝに至つたので、腹の黒い其方の叔父は……聽いてゐるか？

ミラン はい、一心に。

ブロス 一たび政治の權を握つて、請願の許否は勿論、如何なる者を擧げ用ひ、如何なる者を抑へ黜くべきかをも十分會得した所から、予が任じておいた者共を悉く改易してしまつた、すなはち或は其職柄を取換へ、或は其仁を新にし、かくして官と官吏との調音鍵を手に入れたので、國中の者をして己が

好む勝手な音色を奏せしめ、いつの間にか此ブロスベロといふ本木の幹を掩うてしまつて、其生液を吸ふ蔦となつた……聽いてゐぬな。

ミラン

おゝ、父さま、よう聽いてゐます。

ブロス

よう聽いてをれよ。さて、予が斯く現世の務を怠り、閉籠つて、只もう(退隱といふことさへ無くば有らゆる俗の譽れに優る)修養にばかり耽る程に、腹の黒い實弟に、道ならぬ心をば起させたわい。予の信任は、善い親が悪い子を生むやうに、其信任とは反對の不義な心をば起さしめた……限りの無い、果しの無い信任であつたなれど。かやうにして、彼奴は國主顔に、年々の貢物は言ふに及ばず、予の權力を笠に被て、出来る限りのものを取立てをつた。絶えず妄語する癖の者は、遂に自ら欺いて吾と我詐りを實とするに至るものぢやが……實弟めも、久しく予の代理として一切の威權を備へ、表向は國主同様であつたによつて、つい自分が公爵であるやうに思ひ

はじめ……ますます非望が増長して……聽いてをるか?

ミラン

此やうな話を聞けば、聾でも耳が開きませう。

ブロス

名と實との間隔を無くするために、是非とも實のミラン公爵にならうとした。予は、笑止千萬な男! 予には書齋の一つも與つておけば有り餘る公領到底國主たるの器量などは無い者と見くびり、權力に渴する餘り、敵國ネーブルスの王に臣禮を取り、貢物を納め、あさましや! 曾て他國に屈したことの無い我ミラン國に、此上もない恥辱を與へをつたわい!

ミラン

おゝ、まア!

ブロス

其際の條約と結果とを聽いた上で、これでも實弟と言はれるか、判斷して見なさい。

ミラン

かりにも祖母を疑うては濟みません。善い人のお腹からでも不可い兒が幾らも生れませう。

プロス ところで其條約ぢや。元來ネーブルス王は子の爲には仇敵であつたから、喜んで實弟の頼みを聴納れ、若し臣下となつて若干の貢物を納めるといふ條約さへ締ぶならば、すぐさま吾々親子を逐ひ失ひ、ミラン國と共に有らゆる榮譽官爵を、實弟に與へようと約束した。で、アントニオは、二心の兵士等を徵集して、かねて手筈を定めておいた或眞夜中に、ミランの城門を開いたので、草木も眠る眞の暗夜に、命令を受けた役人共が、予をも泣き叫ぶ其方をも、遠く城外へと逐ひ立てをつた。

ミラン あゝ、笑止やく！ その時どのやうに哭いたやら記えてゐぬから、もう一度哭きたうござります。涙を絞り取られるやうな話ぢや。

プロス もう少し聴いてゐると、今さしかゝつてゐる事と聯絡が著く、でないとい此履歴話の筋が立たぬ。

ミラン なせ其時、敵の者が、わたし共を殺さないのでござりますか？



プロス よう問ひましたぞ。さういふ不審が起るべき筈ぢや。女よ、さすがに殺し得なんなのぢや、人民等が、それほど深く予を愛敬してをつたゆゑに。且は、まさかさほどまでに殘忍には得振舞はなんだのぢや。結局、吾々二人を矢庭に船に逐かせて、遙かの沖中まで漕出した、それから船とは名ばかりで、綱具もなければ帆も橋も無く、鼠さへ自然と知つて乗つてをらぬやうな腐れ小舟に、吾々親子を投り込んで突離した。叫べども荒海の、只どうくくと鳴渡り、歎息すれば、風がそ

れに同感してか、あへぐやうに吹立て、生中に二人が身の、仇とも邪魔ともなるばかり。

ミラン

噓、わたしが其時に、厄介物でありましたらうなア!

ブロス

いや、其方は守護神であつたのぢや、其方ゆゑに此命を助けられた! 重荷の下に呻吟して、はふり落つる苦い涙に、大海の水量をも増す程であつた際、天の附與した勇氣によつて、何氣なく莞爾笑うてゐる其方の顔を見るといふと、萎えた氣も回復して、此上どんな艱難が來ようとも、堪へ忍ばうと決心したわい。

ミラン

どうして陸へは上つたのでござりますり?

ブロス

天の祐けでぢや……食料にも、又飲用水にも事を缺かなんだのは、其際護送役を命せられてゐたネーブルスの君子人、ゴンザロが慈悲の賜與であつたのぢや。彼れは、尙其上に、立派な上被類や、麻布や、器具、日用品等をも

恵みくれた、いづれも後に種々の役に立つた。のみならず、予が書籍を愛するのを知つて、公領よりも大切に思ふ數卷の書を、書庫から取出して來て渡してくれた。

ミラン

あゝ、わたし其人に逢うて見たい!

ブロス

もう時刻が來た……

ブロス、ミラン、法服を取りあげつゝ、ミランダに

じつとしてゐい、さうして海の難儀話の結局を聴きなさい。……さて、此島へ漂着して、それから予が教師となつて、いたづら事に時を費す君主等の曾て授け得ない、また師傳などには逆も、く望みがたい、心を籠めた教育を其方に授けた。

ミラン

神様、どうぞ父上にお禮言うて下さりませ! それからどういふ譯で颯風をお起しなされましたか? ……あゝ、それがまだ此心の中で騒いでゐる。

……さア父様、どうぞそれを話して下され。

プロス では、これだけ話しておく。……不思議な廻り合せで、従来は不深切であつた運命の神が、今は予の身方になつて、怨ある者共を今日此濱邊へ引寄せてくれた。天文を勘考へて見たところ、予の榮枯盛衰は不思議な一つの瑞星に懸つてゐる。今若し其星の力を等閑に附するときは、予の運命はだん／＼衰へるばかりになる。……もう問ふのは止めなさい。眠たうなつたらしい。恰ど好い。眠なさい。……眠らずにはをられん筈ぢや……

ミランダ 眠る。プロスベロ空中に向ひて

来いよく！ もう可いぞ。 參れ、エリエル。 早う来い！

エリエル 出て来る。

エリエル 御機嫌よう、御機嫌よう、お師匠さま！ お、お師匠さま！ 何御用でござりまする！ 翔ぶのでも、泳ぐのでも、火の中へ潜るのでも、渦卷雲に乗る

のでも、お師匠さまの命令なら、エリエルは力の有つただけ勤めまする。

プロス

精靈よ、吩咐しておいた大颶風は、悉く爲果せたか？

エリエル

はい、一つも残さず。……御座船へ飛移つて、すさまじい火焰となつて、或時は艦で、或時は中央の甲板で、又或時は各船室に燃擴り、又急に分裂して一度にあちこちで燃立ちました。 大帆檣や帆桁や



船嘴、一度期に燃上ると見せておいて、又直に合併して、一塊りになつて燃立ちました。目にも止まらない其敏速さ。ジョーヴ神の稲光り、あの怖しい霹靂の前觸役、の速さとても是ほどではござりますまい。電光と殷雷とが大わだつみを取圍んで攻めたので、さすがに猛しい大海も震慄へ出し、龍王が手に持つ三叉戟さへ搖ぐやうに見えました。

フロス　うい奴ぢや、感心く！それほどの騒動では、いかな沈着な者とても、取亂さずには居らなんだであらうなり。

エリエ　狂氣のやうに逆上せて、死物狂ひにならぬ者は、只の一人もありませんだ。水夫の外は、残らず荒濤へ跳り込んで、恰ど其時燃上つた王の本船を離れました。王子のファーディナンドは、頭髪を葦の葉のやうに逆立て、「地獄を擧つて悪魔めが押寄せて來をつた」と叫びながら、眞先に海へ飛込みました。

フロス　はて、それでこそ予の使魔ぢや！それは、つい岸近くであつたらうなり！

エリエ　はい、つい近くでござります。

フロス　が、みんな無事であらうなり？

エリエ　頭髪一筋もなくなりませぬ。潮水に彼等を支へてゐた其上被も、汚れるどころか鮮かになつたくらゐ。それから、命の通りに、彼等を幾組にもあちらこちらに散しました。王子はわざと一人きり上陸させ、人の知らぬ島かげに休ませておいて來ましたが、儼いで、如是風に腕組して、溜息ばかりしてをります。

フロス　王の本船の水夫共や其他の奴等は、如何取計らうたり？

エリエ　王の船は、何事もなく港の中に、それ、あの奥深い、いつぞや夜中に予を呼んで、常住暴風の惡魔島から露を取つて來いと吩咐けなされた、あの奥深い入江の中に、ちやんと本船は匿してあります。水夫共は、残らず船底へ押

込めて、疲れぬいてゐる處へ咒ひをかけ、其儘眠らせておきました。それから散りくになつた他の船共は、其後又一しよにはなりましたが、御座船は毀れ、王は死なられたとばかり思ひ込んで、力なげに本國さして、もう地中海へ乗出しました。

プロス エリエルよ、命令通りに善く爲果せた。が、まだ用がある。……何時ぢや?

エリエ もう正午を二時間以上も過ぎました。

プロス 今から夕方の六時までを、最も大切に使はにやならんぞ。

エリエ え、まだ仕事せにやなりませんか? 手に骨を折らせるなら、約束を忘れて下さりますな、まだ其儘になつてゐるあの約束を。

プロス 何ぢや、そのふくれ面は? 約束とは何ぢや?

エリエ 身を自由にして下さる筈ぢや。

プロス まだ期限が来もせんのに? 最早!

エリエ 善う奉公をしたのを思うて下され。嘘は言はなんだし、爲損じもせなんだし、苦情もいはず、愚痴も言はなんだ。それで恰ど一年だけ年期を減してやると約束をなされました。

プロス 忘れをつたな、どんな苦みから予が汝を救うたかを?

エリエ いゝえ、忘れません。

プロス いゝや、忘れた。鹽海の底を潜つたり、雪風に踏踏つたり、霜で裂開れてゐる地の中へ潜るぐらゐを、大層な奉公ぢやと思つてをるのか?

エリエ いゝえ、さうは思ひません。

プロス 嘘を吐け、鼻曲りめが! 忘れたか、あの魔法使ひのシコラックスを? 齡も積り、悪心も積つて、輪のやうに曲りくねつた妖婆を? シコラックスを忘れたか?

エリエ いゝえ、忘れません。

プロス いゝや、忘れた。彼奴は何處で生れた？ それを言へ。言つて見ろ。

エリエ アージャールで生れました。

プロス おゝ、さやうか！ ……おのれのやうな奴は、月に一度ぐらゐづ、昔の事を數へ立てぬと、忘れをる。あの魔法使ひのシコラックスは、種々の悪事の外に、聞くに堪へん怖しい邪法の科で、汝の知つてゐる通り、アージャールから追放された、命だけは或る功勞のゆゑに助けられた。……さうであらうか？

エリエ さやうでござります。

プロス

其碧眼の妖婆は、懐胎のまゝ、水夫共に護送されて、此島に棄てられた。其際汝は、汝自身の話によると、彼奴に使はれる身となつたのぢやが、生得孱弱い、繊細な精靈であるが爲に、あの婆の吩咐ける怖しい穢はしい命令には應じかねたので、彼奴が大きに腹を立て、勢ひの強い使魔らに手傳は

せて、松の幹を引裂いて、汝を其裂目に挟み込めてしまつた。で十二年間といふもの身動も出来ず苦しむうち、婆は死んで、汝は其儘に残り、粉磨車こなりきぐるまが叩くやうに、夜晝に洩す呻吟聲うめきごゑ。其頃此島には、妖婆が生み残した黄斑きまつたらの鬼子の他には、人間らしい者の影もなかつた。

エリエ それは婆の子のカリバンぢや。

プロス 馬鹿、さう言うてをるわい。予が今使うてをるあのカリバンの事ぢや。

あの際の汝の苦みは汝が最も善く知つてをる筈ぢや。汝の呻吟聲には、狼もおびえて吠えた、猛しい荒熊の胸にさへも徹した。すなはち地獄の罪人が蒙る苛責で、シコラックス自身とても解戻しかねる呪縛であつたのを、予が来て、汝の歎きを聴き、法力で松の幹を披いて、其難儀をば脱れさせてやつた。

エリエ ありがたうござりました。

ブロス 此上若しぐづくいふと、櫛の幹を裂いて、其瘤々だらけの胴中に汝を引
挟んで、また十二年の冬を吠えさせるぞ。

エリエ 堪忍して下され、どんな命令にも従ひますから、柔順く仕事をしますから。

ブロス 勉強しろ、さうすれば二日経つと自由をくれる。

エリエ や！ それでこそ予のお師匠さまぢや！ え、何をしませうぞ？ さ、何
を？ え、何をしませうぞ？

ブロス さ、往つて海の女神に化けて来い。予の他には姿を見せるな、他の者の目
には見えぬやうにぢや。 さ、其姿になつて此處へ来い。早う往け、急い
で！

エリエル 中を飛んで入る。ブロスへは眠つてゐるミランダに向
ひて

ブロス 起きろよ、むすめ、さ、起きなさい！ よう眠たぞよ。起きろ！

ミラン 父様のお話が、あんまり不思議なので、つい眠たうなつた。

ブロス さ、眠氣を拂うて、こつちへ来なさい。カリバンめを見て来よう、彼奴め曾
ぞ柔順な返辭をしをらん。

ミラン あのやうな奴、わたしや見るのも厭ぢや。

ブロス でも、今のところ、彼奴がぬと困る。火を焚いたり、薪を取つて来たり、
いろいろの役に立つから……

窟の方に向ひて

やいく、奴！ カリバン！ やい、土塊！ 返辭をせい！

カリバ (奥にて) 薪はまだ澤山あらア。

ブロス 出て来いと言ふに！ 他に用があるのぢや。出て来い、泥龜めが！ こ
ら！……

エリエル 美しき海の女神と化して出て来る。ブロスへ口之を仰

ぎ見て

見事々々！ エリエルよ、こりや、耳を借せ。

何事か エリエルに囁く。

エリエル かしこまりました。

エリエル 入る。プロスベロ 又窟に向ひて

プロス やい、毒物め、悪魔が鬼婆に生ませをつた奴！ 出て来いといふに！

カリバン 出る。

カリバ

阿母が大島の羽で掻集めた有りつたけの沼の毒が、汝らに降りかゝつてくれ！ 南西が吹いて来て、汝らの全身水ぶくれになつちまへ！

プロス そんなことをいふと、其罰で今夜手足が痙攣して、息が止るほどに脇腹が引釣るぞよ。それから小鬼どもが、横行の許してある夜中かゝつて、汝を責み、五體を隙間もなく捻り立てるぞ、其痕は蜂窩のやうになつて、其一捻り

は、一つづくに、蜂が刺すよりも痛いぞよ。

カリバ

でも、食はずにはをられんもの。……此島は予のだ、阿母のシコラックスが與れたのだ、それを汝が取つちまつたんだ。はじめて来た時に、汝おれの頭を撫で、おそろしく予を大事にして、妙な實の入つた水をくれたり、夜と晝とに光るあの小さい方は何といふ、大きい方は何といふなんて教へたりなんかし



をつたので、予われが好すになつて、島中の種いん々な事ことを教しへてやつた、清水しみずや鹽溜しほたまりりや實みのる處ところや實みのらん處ところや。あゝ予われ、馬鹿ばかなことしつちまつた！……阿母あははの呪まじなひの有ありつたけ、蝦蟇かまよ、甲蟲かぶとけしよ、蝙蝠かうもつよ、悉みんな皆あ汝のしらの身みに取附とついてくれ！ もとは予われが此處ここの王わうさまだつたのに、今いまちや予われは汝のしのたつた一人ひとりの家來けらいになつちまつた。汝のしは予われをば此堅このかたいゝ岩いの中なかへ押込おしこめて、島をとりあげてしまやがつた。

プロス 此大虚言者このおほほうそつぎめが！ 答こたを以もつてすれば動うごすことを得うれども、慈悲じひを以もつてしては動うごしがたい奴やつ！ 穢けがらしい奴やつではあるが、可哀あはれさうに思おもうて慈悲じひをかけ、此窟このくわに宿やどらせてまでやつたものを、遂つひに不埒ふらちにも我兒わがこをば辱はづしめようといたしをつた。

カリバ おほゝゝ……惜あはしいことをしつちまつた！ おのしに邪魔じやまをされなんだら、此島このしまをカリバンで一いちばいにしつちまつたものを。

プロス おそろしい人でなしめが！ おのれは悪い事わるいことなら如何どうなことも習ならひをるが、善よい事ことの印象いんしやうは少しでも留とどめをらぬ。憫然みげんに思おもうて、どうかして物を言いひ習ならはせうと苦心くしんし、毎日まいにち毎刻まいこくいろゝな事ことを教しへた。更さらに言いはうとすることを辨わへず、甚はなしい下等かとうの獸類じうるぶ同様に、わけもないことを囁ささつてをつた時じ分に、意味いみを通つうする語ことばを授まけて、其目的そのもくてきに便べんせしめた。けれども汝のしの下劣げうな天性てんせいは、如何程どうほど教しへ學まなばせても改あららんから、逆さかも善よい人間にんげんとは同棲どうせいさすることが出来できん。此岩このいの中なかへ押籠おしこめておくのは當然たうぜんの事ことぢや、牢ろうへ入れておいてもよいくらゐの奴やつぢや。

カリバ おのしらが予われに語ことばを教しへやがつたんで、惡口あくぐちをすることだけ習ならつたい。語ことばなんか教しへやがつた罰ばちで、二人ふたりとも丹毒たんどくにかゝつちまへ！

プロス 退ひれ、魔まの嵐たけなめが！ 早はやく薪きを取りとりに往ゆけ。他ほかにも用もちがあるから、早はやくせぬと爲ためにならんぞ。おのれ、肩かたをゆすぶつたな？ 命令いのつひを怠おこつたり、不承ふしょう々々

々勤めたりなんかすると、手足を怖しく痙攣させ、骨々を挫ぎつけ、獸類も其聲を聞いて戦へ慄くほどに吠えさせるぞ。

カリバ どうぞ堪忍してくれ！ 堪忍してくれ！……（傍白）いふことを聴かなければならん、奴は偉い術を使ひをるから、阿母の神様のセテボスだつて敵はないんだから。

ブロス さうだ、早く往け！

カリバン 入る。

エリエル前の如く人の目には見えざる女神の姿のまゝにて、樂を奏しつゝ、歌を唱ひつゝ再び出て来る。それについて王子ファアヤナンド出る。

エリエル（歌ふ）

來よ、此黄なる眞砂に、

さて取れや手と手を。

會釋し了へて接吻して、――

あら浪も和ぎぬ。――

しなよく踊れ、こゝに、そこに。

はしき精靈よ、歌へ、囃せ。

聞けや、聞けや！

（此時あちこちにて拍子言葉聞える。）

バウ、ワウ！

犬こそ吠ゆれ、

（又拍子言葉）

バウ、ワウ！

聞けや、聞けや、啼くよ

容體ぶつたる庭鶏、

コックドードルズー!



エリエ
(又歌ふ)

フアー

あの音楽は何處から聞える? 空からか、
地中からか? ……もう聞えぬ。……きつと
此島の神か何か奏させるのであらう。…
…海岸に腰を掛けて、父王の難船を歎いて
ゐると、あの音楽が海上から這寄つて来て、
妙なる音色で浪をも此胸の荒れるのを鎮
めてくれた。それから其音を追うて、とい
ふよりも、つい引摺られて此處まで来た。…
…が、もう去つてしまつた。……いや、また
始めた。

五尋深き水底に、

御父上は臥したまふ。

御骨は珊瑚、眞珠こそ

その以前君が御龍眼。

御體の一切朽ちもせで、

寶と化しぬ海に入りて。

聞かずや海の女神等が

(此時奥にて)

ダイーン・ドーン!

あれ、君を弔ふ鐘!

ダイーン・ドーン、ベル、!

フアー

あの唄は、溺死なされた父上を弔うてゐる。……こりや人間の仕業では無い、

あの聲も下界の聲ではない。……今度は頭上で聞える。

（ミランダに）ミランダを連れてや、前へ進み出る。

プロス （ミランダに）そなたの目の帳をかゝげて、あそこに何が見えるか、言うて見なさい。

ミラン （ファーザナンドを見て）や、ありや何ぢや？ 精霊か？ まア、方々を見廻して

ゐる！……なア、父様、ほんとに立派な姿ぢや！……でもありや精霊ぢや。

プロス いゝや、精霊ではない。あれは物を喰ふ、眠もする、目も鼻も、吾々のと全く

同じのを有つてをる、あれ、あの若者は、難船した者の一人ぢや。美を

食ふ愁歎といふ螟蛉に損はれてゐんだら、そなたが見て好い男子ぢやと

言うたであらう。はぐれた友達を捜して、さまようてをるのぢや。

ミラン わたしや神様のやうちやと言ひませう。曾ぞまだあんな高尚い者を見た

ことはないから。

プロス （傍白）思うた通りにうまく行くわい。……（空中に向ひて）精霊よ、うい奴ぢ

や！ 此褒美に、二日のうちに暇をやるぞ。

ファー （ミランダを見つけて）必然あれば、先刻の音楽が奉仕へてゐる女神であらう！

（跪きてミランダに）祈願し奉ります、此島にお鎮りなされるお方でござります

か？ わたくしは此處で如何やうに致したら宜しうござりますか、どうか

お訓へ下さりませ。第一に承はりたいは、（最後に）申しますものゝお、

不思議なお方！ あなたは只の娘御でおありなされるのか、ないのか、それを

まづおほせられて下さりませ。

ミラン いゝえ、不思議な者ではない。わたしは處女ぢや。

ファー （傍白）やア！ 國の語を使つた！……（ミランダに）其語の使はれる本國にさ

へ居たならば、わたしは其語を使ふ者の中で、此上もない身分の者ぢや。

プロス 何！ 此上もない身分の者ぢや？ それをネーブルスの國王に聞かれた

ら、おぬしの身の爲になるまいぞよ。

ファイ 天にも地にも、たゞ一人きりとなつてゐるのに、ネーブルス王の噂を聞くといふは不思議なことぢや。語るも聞くも、一人きりであればこそ悲むのぢや。わしが即ちネーブルス王ぢや、目前父王の難船せられるのを見て以來は、此目の乾く間もないのぢや。

ミラン あゝ、氣の毒なことぢや！

ファイ 全くの事ぢや。貴族等一同とても同様。ミラン公父子も一しよぢや。

プロス (傍白) いや、それは間違つてゐる、と此ミラン公父子が遮つても可いのぢやが、まだ少し機が早い。……只一目見て、目と目を見交しをつた。……うい奴ぢや、エリエルよ、此褒美には暇をやるぞ！……(ファイザナンドに)一寸申すことがある。お前さんの言はれたことは甚だ意を得ない。ま、一寸。

プロスベロ一隅へファイザナンドを伴ひ行く。

ミラン

(傍白) 何故父様は、あんなに荒々しくいひなさるのであらう？これがわしが見た三人目の人間ぢや。なつかしう思つた初めての人ぢや。どうぞ父様にも、わしと同じに優しい氣になつて欲しい！

此中ファイザナンドはプロスベロに離れる。

ファイ

(ミランに) あゝ、若し貴嬢が、まだ誰にも情をお許しなされたことのない處女御であるならば、わたしは貴嬢をネーブルスの王妃にお迎へ申したい。

プロスベロ二人の間に入る。

プロス

(ファイザナンドに) ま、お待ちなさい。まだ言ふことがある。……(傍白) お互ひに心を奪はれてゐる。が、速かに運ぶのを故と難しくせねばならん。餘り容易く手に入ると、兎角それを粗末に思ふ。……(ファイザナンドに) まだ言ふことがある。是非聴きなさい。お前はよい加減な名前を騙つて、さうして間諜となつて此處へ入込んで、此島を奪ひとらうと企んでゐるのぢや。

ファー いゝや、没してそんな覚えはない。

ミラン (アロスベロに)あのやうな立派な姿の中に、悪い者なんか住んでゐよう筈がない。あれが悪い魂の家であるなら、善い魂とても一しよに住みたがるであらう。

ブロス (ファーザナンドに)こつちへ来い。……(ミランダに)えゝ、彼奴を庇ふな。あれは騙賊ぢや。……(ファーザナンドに)さ、足や首に械を掛けて、潮水を飲ますぞ。喰ふものは、貽貝と枯草の根と團栗の殻ぢや。……従いて来い。

ファー いゝや、そんな待遇は受けん、力の及ぶ限りは。

劍を抜いて斬らうとする。ブロスベロ魔法杖を揮ふ。ファーザナンド呪縛される。

ミラン あれ、父様、そのやうに手荒うなされますな。優しさうで、怖らしうは見えぬ人ぢやに。

ブロン 何ぢや！ 阿呆の癖に、指揮を

するの！……(ファーザナンドに) 劍を鞘に藏れる、大騙賊め。撃つ真似はしても、撃ち得まいがの。それ其通り身の罪に心が咎める。其身構を止めい。此杖を一揮揮れば、おのしの其武器は落ちてしまふから。

ミラン 父さま、どうぞ、父さま！

ブロス 退け！ 袖にすがるな。

ミラン どうぞ堪忍して下され。わたしが證人になりまする。



ブロス 黙りなさい！ 此上何とか言ふと、叱るぞよ、憎いと思はんまでも。何ぢや、騙賊の庇護立をする！ 叱！ 彼奴ほどの男は、最早無いと思ふのか？ 彼とカリバンの他を見たことがないので。阿呆めが！ 大抵の人間に比べると、此奴はカリバンも同様、さうして他の男共は、此奴に比べれば、みんな天使ぢや。

ミラン ではわたしの望みは卑しいのぢや、此人よりも立派なのを欲しいとは思はぬ。

ブロス (ファイヤナンドに) さ、いふことを聴け。汝の筋力は幼孩の昔に復つた、もう何の力も無いわ。

ファイ (手を動かさうと試みて) なるほど、さうぢや。まるで夢を見てゐる時のやうに、心の自由を失うてしまつた。(ミランダを見やりて) 父の死も、我力の衰へも、友達を亡うた悲みも、敵しがたい此男の脅嚇も、もう予は何とも思はん、もし

牢屋の窓口から、日にたつた一度だけあの娘の顔を見ることが出来れば。此處の外の世界は、どこなりと勝手に使ひをれ、幽閉められても、此處には廣い天地がある。

ブロス (傍白) うまく行く。……(ファイヤナンドに) さ、来い。……(空に向ひて) エリエルよ、感心ぢや！ 出来しをつた！……(ファイヤナンドに) 従いて来い。……(エリエルに) こりやまだ吩咐けることがあるぞ。

エリエル 進み出る。

ミラン (ファイヤナンドに) 氣づかひなさるな。父さまは言葉附よりは善い人ぢやに。今日の様子は平生とは異ふ。

ブロス (エリエルに) 山の風のやうに自由にしてやる。其の代り吩咐けた事を少しでも違へるな。

エリエル 一音でも違へません。

プロス (フアーヤナンドに) さ、従いて來い。(ミランダに) 庇護立をするな。

みなく入る。

*
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

第二幕

第一場 島の他の方面。

ネープルス王アロンゾ、其弟セバスチヤン、ミラン公アントニオ、老顧問官
ゴンザロ、貴族アドリヤン、同フランシスコ、其他出て來る。

ゴンザ (王に) もし、御快活に遊ばされませ。お喜びあるが當然でござります……
私共とてもでござります。と申すのは、命を助りましたのは、此不幸以上の
の大きな幸福でござります。悲歎の機縁は天下共通でござります、毎日或

水夫の妻、或商船の船長、乃至其荷主の商人が、吾々同様の悪運に遭うてをりまする。併しながら、吾々のやうに不思議の冥助を得るものは(助つたのを申すのでござりますが)百萬人中の一二人でござりませう。なれば、何卒御賢明に、此お喜びを以て此たびの御不幸をお慰めなされませい。

アロン

黙つてゐてくれ。

王とゴンザロとの問答の間、アドリヤン等は黙してゴンザロの後ろに立ちて控へ居り、アントニオとセバスチャンとは、少しく立離れて、以下始終傍白を續けて、ゴンザロ等が落膽せる王を慰めんとてさまざまに努力するを無益なりとて嘲り笑ふ。

セバス

(傍白) 折角の御慰問も、冷雑水扱ひと來てゐる。

アント

(セバスチャンに) 處が、御慰問係りは、そんなことで凹むやうな和尚さんぢやありません。

セバス

(アントニオに) 御覽なさい、大將頻に智慧の時計を捲いてゐる。今にチーンと來るだらう。

ゴンザ

(王に) え、もし……

セバス

(アントニオに) 一つ……算へたまへ。

ゴンザ

(格言らしく) え、悲み來る時は、之を珍客の如く歡待せよ、然らんには自然にして……

セバス

(わざと聞えるやうに) 金貨が儲かる。

ゴンザ

(セバスチャンを見返りて) いかにも。觀念が出来る、諦めが著く……言はうと思つておいでなされたよりも、正當なことをお言ひなされたのぢや。

セバス

(ゴンザロに) いや、此方が思つてゐたよりも其方が利口に解いたのだ。

ゴンザ

(王に) で御座りまするから……

アント

(傍白) 馬鹿な無駄口を利きたがる男もあつたものだ!

ゴンザ (王に) 且つ此處には、生活に便利なものが、悉く備つてをります。

アント (傍白) いかにも。只生きてゐるに都合のよいものが無いばかりだ。

セバス さやう。さういふ便宜は、全然無いか、でなければ、ほんの少々だ。

ゴンザ (王に) 草が如何にも滋々と生茂つてをります。如何にも青々と!

アント (傍) 道理で地面が朽葉色に見える。

セバス (傍) 中に只僅少緑色があつてね。

アント だから大した間違ぢやない。

セバス さやう。全然違つてるばかりだ。

ゴンザ (王に) 併しながら最も珍しい……幾んど信せられませんが……奇異な事と申すは……

セバス (傍) 兎角珍しい事は信せられんのが定例だ。

ゴンザ ……吾々の衣服が、たしかに海水に浸つたのでござりますのに、依然とし

て其新しさと光澤とを失はないでゐることとでござります。潮水の爲に汚

れるどころか、却つて染返しましたほどでござります。

アント (傍) へん、袖口といふ口が物を言ふものなら、嘘を吐けと言ふだらう。

セバス さやう。或はそれを知つてゐても、衣服だけに、胸の中に疊んでおくかな。

ゴンザ (セバスチャンを見返りて) 私存じますに、吾々共の服の色は、王の御姫君クラリ

ベルさまがチュニス王と御結婚遊ばしました其際、即ちアフリカに於て著

用いたしました時分と、更に異らんやうに存せられます。

セバス さやう、あれは目出たい婚禮でしたよ、だから歸り途も目出たい事だらけなのだ。

アドリ あゝいふ立派なお方が、チュニスの妃殿下とならせられたは、蓋し空前の事でありませう。

ゴンザ 未亡人ダイドー殿以後には無いことぢや。

アント (傍) 未亡人だ！ とんでもない！ 後家さんを持出すとは如何したもの

だ？ (節を付けて)「あゝ、後家さんダイドー！」

セバス まだしも後家さんで幸福だ！ 男寡が何とやらとでも言つたのちや始末
が附くまい。

アドリ (ゴンザロに) 未亡人ダイドーとお言ひでしたね？ 少々了解致しかねます。

ダイドーはカーセイジ城の女君でありました、チュニス國の王妃ではなく。

ゴンザ そゝ、そのチュニスが即ちカーセイジ。

ゴンザロは強ひてアドリヤンに呑込ませようとする。

アドリ (呑込みかいて) カーセイジ？

ゴンザ いかにも、カーセイジ。

アント (笑つて、セバスチャンに) あの男の辯舌は、彼の靈妙な豎琴以上の奇特を現すと
見えますわい。

セバス 成程、見る／＼空中に城廓を築きましたね。

アント 此次には、如何な滅法界な事を容易に實行に及ぶか知れませんか。

セバス 多分此島を衣囊へ入れて持つて歸つて、林檎代りに、奴の小倅に與るでも
あらう。

アント さうして其核を海へ蒔いて、島の繁殖を圖りますかな。

二人は顔に嘲り笑ふ。此時アロンゾ王はじめて顔を上げる。

アロン 嗚呼々々！

アント 恰ど好いところでした。

ゴンザ (王に) 恰ど只今私共は、私共の服の色が、彼のチュニスでお姫さまが御
婚禮遊ばしました節と、更に變らぬやうぢやと申してをりましたところ
ござります……お妃とならせられましたお姫さまの。
彼の國のお妃と致しましては、全く前例のない御方でございます。

セバス (アントニオだけに) おい、後家さんダイドーだけは言ひつこなしだよ。

アント お、後家さんダイドー! さう、(節をつけて)「後家さんダイドー!」

ゴンザ (王に) 私の此上被は、はじめて私が着用いたしました時分と同じことぢやござりませんか? 見やうによりましては。

アント 見やうによりましては妙……みよう!

ゴンザ お姫さまの御婚禮に際して私が着用いたしました時分と。

アロン 聞く氣の無い予の耳へ、幾ら言葉を填込んでも無駄な事ぢや。あ、愛兒をあんな處へ嫁入させねばよかつたものを! 彼處から歸るとて、倅をな

くしたのみならず、女をも失うた同様ぢや、伊太利からは幾千里と隔つてゐれば、もう二度とは逢はれまいわい。あ、ネーブルスをもミランをも受継ぐ筈であつた倅よ、今頃はどんな怪魚の餌食となつてゐることやら!

フラン いや、御存命でございませう。私は若君が拔手を切つて荒浪の脊に乗

らせられるのを見受けました。仇なす海水を掻退け、踏分け、寄せ来る山の如き怒濤を物ともせず、始終波の上に勇敢なる頭を擧げさせられ、逞しい腕を櫓棹となされて、宛然君を迎へ顔に、荒磯に平伏いたしをる岸を目がけて進ませられました。必ず恙なく御上陸あつたことゝ存じます。

アロン いや、彼は亡くなつた!

セバス 此大不幸の禮は、御自身へおつしやるが可い。あなたは姫を、歐羅巴へは與れとむながつて、つまりアフリカへお棄てなすつたのだ。とにかく貴下の眼とは縁離れです、だから、顔が見られないのを歎いて目を濡しなされるだけの物は十分あります。

アロン 黙つてゐてくれ。

セバス ねえ、わたし共一同が膝まづいて、お止しなさいといつて惘願をした。姫みづからとても、厭だとは思ひながら、親の命令だから、どちらを重いと決し

かねてゐたのでした。息子さんは亡くしてしまつたんですよ、恐らく。ミランとネーブルスには、此度の一件の爲に、伴れて歸る男子の數よりもすつと多數の、氣の毒な未亡人が出來ましたよ。それは悉皆貴下の過失だ。最ち辛い損失もまた予の過失ぢや。

アロン
ゴングザ セバスチャンさま、貴下のおつしやる事は眞實には相違ないが、おつしやりやうが少々手荒ぢや、又機もわるい。膏藥をお貼附なさるべき痛み處を、お擦りなさるとは如何したものでござりまする?

セバス いかさま。

アント (セバスチャンに) 外科の先生よろしくでき。

ゴングザ (王に) もし、あなたのお顔に雲が懸つてをりますると、それが私共一同の曇天と相成りまする。

セバス え、曇天だ!

アント やれ、鈍な洒落だ!

ゴングザ (王に) 若し私が此島を開拓致しますれば……

アント (傍) 蕁麻の種でも蒔くかね?

セバス (傍) で無くば莠か、乃至錦葵か?

ゴングザ ……さうして國王と相成りましたならば、え、どんな事を致しませうかなり? ……

セバス (傍) 酒といふものが無いから、とにかく亂酔になることだけは助かるだらう。

ゴングザ ……其社會におきましては、私何事も、すべて普通とは反對に行らせまする。商賣乃至取引は一切許しません。官吏も無く、文學も知られず、富貴も無く、貧賤も無く、奉公といふことも無し。契約も相續も境界も領分も耕地も葡萄棚も何にもございませぬ。金屬も穀物も酒も油も無し。職業

も無し。人は悉く無爲、何にも致しません。女共とても。但し何れも清浄純潔。君主権といふものもございませぬ。……

セバス (傍) 君主権が無いのに、大將、その國王にならうといふのだ!

アント 大將の共和國は、尻尾と頭と離れくゞだと思える。

ゴンサ ……萬人共用の必要品は、汗なく努力なくして天然が之を生じくれます。叛逆もなく、重罪もなく、劍も無用、鎗も短刀も鐵砲も無用、其他何等の機械も用ひませぬ、なれども天然自然に五穀 悉く豊かに實つて、配下の無邪氣な人民共を養ひます。……

セバス 結婚も奴の配下中には無しかなり?

アント 無しですとも。どいつもこいつも懶惰者の淫婦と惡漢ばかりです。

ゴンサ ……私は、黄金時代そのこのけの、圓滿完全な政治を行ひます。……

セバス ようく、陛下萬歳!

アント ゴンザロ陛下萬歳!

ゴンサ ……而うして……もしく……

アロン もう止してくれ。何の役にも立たんことを言うてくれるな。

ゴンサ いや、御道理でござります。私は只此……(セバスチャン等を見返りて) 役にも立たん事を可笑しがつて笑ひ騒ぐ人達に、笑ひの種を供給してゐたのでござります。

アント わたし達はお前さんが役に立たんから笑つてゐたのだ。

ゴンサ いかさま、馬鹿げた洒落は貴下がたの専門ぢや、わたしは逆も其役には立ちませぬ。

アント はい、一本參つたといふ譯かね!

セバス 若し脊撃で無かつたならばだ。

ゴンサ はて、貴下がたは偉い強いお人達ぢや。若し月が圓くなつたまゝで虧けん

であるやうなことがあつたら、随分腕づくで、それを其圓座から、引摺りおろしかねんお人達ぢや。

セバス さうとも、さうしてそれを提灯代りにして、蝙蝠狩に出掛けるよ。

エリエル 以前の如く形を隠して出て来る。同時に嚴肅な音楽が聞える。

アント (ゴンザロに) ねえ、老君、まよ、怒りたまふな。

ゴンザ 決して怒りません。そんな愚かな、無分別は致しません。どうか駄洒落で眠せつけて下さい、ひどく眠たくなりましたから。

アント さ、お寝みなさい、さうしてお望みなら聴かせませう。

エリエル 呪ひを行ふ。みなく眠る。王とセバスチャンとアントニオとだけは尙起きてゐる。

アロン や、もう一同眠たか！ あゝ、わしも此辛い思ひを目と一しよに眠らせた

いわい。……どうやら眠たくなつて来た。

セバス お眠くなつたら、お寝みなさい。兎角悲しいと眠られないものですが、眠られれば心が慰みます。

アント お寝み中は、きつと二人で御安泰に護衛します。

アロン ありがたう。……あゝ、眠たい！

王 眠る。エリエル 入る。

セバス どうしたんだらう？ みんなが不思議に眠たがつてゐる！

アント 此土地の氣温の故ですね。

セバス それなら吾々の目蓋も重くなりさうなものだ。わたしは眠たいとは思はないね。

アント わたしもです。わたしの神經は依然として活潑です。彼等は、全然言ひ合せたやうに、一しよくに轉倒つてしまひました。雷にでも撃たれたや

うに、ばたくと倒れた。……ねえ、如何な事になるでせう？セバスチャンさん、……あ、如何な事になるでせう？……が、ま、止ませうよ！……けれども、どうも貴下の顔に、貴下の将来が歴々と見えてゐるやうに思ひますねえ。機會が、貴下の鼻の先にぶらついてゐる。わたしの強烈な想像は、貴下の頭の上に、最早金の冠りが墮ちかゝつてゐるのを見てゐます。

セバス おい、起きてるのですかい？

アント 物を言つてるのが聞えませんか？

セバス 聞えてる。が、全然寢言だよ、眠てゐて物を言つてるのだらう。何を言つてるんだね？ 奇態な眠かたもあるもんだなア！ 目をくわつと開いて眠てるんだ、突立つて、饒舌つて、動いてゐて、それで善く眠てるんだ。

アント セバスチャンさん、貴下は好い運を眠らせてるのだ……死なせてるのだ寧ろ。

貴下は起きてゐながら目を閉いでゐなさるのだ。

セバス おや！ 躰にしちや分明してゐる。君の躰には意味があるね。

アント わたしは平生よりも眞面目です。わたしの忠告を聴く氣なら貴下も、大眞面目にお成りなさらなけりやならん。さうすれば貴下は三倍にもなる。

セバス よろしい、わたしは淀み水です。

アント ぢや、上潮におなりになるやうに教へませう。

セバス 何卒。退潮の方なら生得の懶惰根性が教へてくれるがね。

アント その、戯言におつしやる事が、取りも直さず肝腎の事に觸れてゐるのです、其處にお氣が附いたらばなア！ 無意味の積りでおつしやる言葉に甚深の意味が籠つてゐるのが、あ、お解りになればなア！ 實際、引込根性の爲に、最底にばかり干固つてゐる男がありますよ。

セバス 何卒その後を。目の据ゑ方といひ、頬邊の色といひ、こりや何か大事件が

ありますね。それを産み出すのは大分苦痛らしい。

アント
斯うなんです。健忘性の此卿が（アドリヤンへ思入をして）……土へ入つてゐるも同然の此毫碌どのが……奴は辯舌だけが長所ですからね……先刻王に、王子は生きてゐるに相違ないと思はせるやうに説込んでゐましたが、今此處に眠つてゐる手が泳いでる筈はないと同様に、王子が助つてゐられよう筈はありません。

セバス
いかにも。彼れが死なないでゐるといふ望みは無いと思ふね。

アント
さ、その望みの無い所からして、貴下の大きな望みが成立つ！ あつちに望みの無いのが、此方に素晴らしい望みの有る所以です、どんな大功名心も、それ以上の目的は到底發見し得ないといふ程の望みの生ずる所以です。

貴下はフアーディナンドさんが亡なつたといふ事は御同意ですか？

セバス
死んだに相違ない。

アント
では承はりませう、だれがネーブルス王の嗣君となられますか？

セバス
クラリベルさ。

アント
チュニスの妃となられた、人間の一生涯以上の距離に住はれる御婦人がですか？ 大陽が飛脚にならぬ以上は（月中の人では遅過ぎる）生れたての赤ん坊の願に剃刀が當るやうになるまでも消息を受取りさうにない御婦人がですか？ 其御婦人に別れて歸る途中で、大海に呑まれ且つ吐出されて、貴下もわたしも、妙な劇を演ずるやうな廻り合せになつたのです、つい先刻までの事件は其前口上なのです。

セバス
何だ？……何を言つてゐるのだ？ 成程、兄の女はチュニスの王妃だ。が、ネーブルスの嗣君でもあるのだ。ネーブルスとチュニスとの間には、大分空間があるには相違ない。

アント
その空間の各一尺々々が叫びてまさ、此長い距離を女性のクラリベルさ

ん、貴女の足でネーブルスまで量り戻られるものぢやない！ 貴女はチュニスにゐなさる方が可い。セバスチャンさんに頼んで、目を覺してお貰ひなさい！」と斯う言つてまさ。……（眠れる人々を見やりて）此手合は、死んでゐるのだとしたら如何です？ 今と別段變つたこともありません。眠てゐる此人以外にネーブルス王になり得る人があります。此ゴンザロに劣らずべちやくくと無駄口をき、得る貴族は幾らもゐます。わたしの手で阿呆鳥を躰けりや、大丈夫、奴ぐらゐには立派に饒舌らせて御覽に入れる。あゝ、貴下がわたしと同じ料簡におんななさりさへすればなア！ 此一睡は貴下の出世の緒だのになア！ え、解りましたか？

セバス 解つたやうだ。

アント 如何お思ひです、ね此好運を、御満足ですかね？

セバス 貴下は、兄貴のプロスペロを逐出したつけねえ。

アント 其通り。御覽なさい、善く似合ひませう此衣服が、前に着てゐた着物よりも。兄の家來があの時分はわたしの同僚であつた、今はわたしの家來だ。

セバス ですが、君の良心に尋ねたならば……

アント 良心？ さやう。良心で奴は何處にゐますね？ 奴が輝か赤裂なら、或は

柔靴を穿く必要があるかも知れないが、胸の邊にやそんな神様はゐさうにありませんね。わたしとミラン公爵との間に、たとひ良心奴が二十あらうと、凍つて融けてしまひまさア、わたしの邪魔をする前に！ ねえ、こゝに貴下の兄貴が臥てゐる。まるで死んでゐるやうだが、實際これが死んでゐるのでありや、地盤の土塊も同様です。わたしが此忠實な劍を三寸だけ用ひりや、永久に起きないやうにすることが出来る。同時に貴下が、此老骨を斯うやらかしやア、此お利口さんを……吾々の所行に難辯を附けさせないやうに……永久の眠りに就かせることが出来る。其他の奴等は、此

方の仕向け次第で、乳汁を宛與はれた猫同様になります。一時なり、二時なり、言ふなり次第の時を打ちます。

セバス 君の先例に倣ひますよ。君がミランを手に入れられたやうに、我輩もネーブルスを手に入れようよ。劍を抜きたまへ。一撃の功で以て君の貢物を永遠に免除するよ、さうして王となつて永く君を愛するよ。

アント 一しよに抜きませう。わたしが揮上げたら、貴下も揮上げて、ゴンザロをやつつけなさい。

セバス 一寸言ふことがある。

二人一隅に寄りて何事か耳語してゐる。音楽聞えて、エリエル前の通り、隠形の體にて又出て来る。眠れるゴンザロの傍に立ちて

エリエ

師匠は、神通力で、其親友たる貴下の身の危いことを知つて、此人々を救ふ

ためにわたしをよこしたのです、さうでないと、折角の計畫が無効になるから。

ゴンザロの傍にて歌ふ。

甦かき眠て在す間に、

皿眼做す悪計

隙を窺ふ。

命を惜しくおぼさば、

疾く拂へ眠りを。疾く。

起きよ！ 起きよ！

アントニオとセバスチャン劍を抜き持ちてゴンザロ等に近づく。

アント ちや一しよに、突然にやりませう。

ゴンザ (目を覺して) あゝ、善天使よ、何卒王のお身をお護り下さい！……

眠れる一同の者やうやく目を覺す。

おやく、どうなされたのぢや？……(皆々に)おい！ 起きた！

……何故劍を抜いてゐなされます？ なせそんな怖しさうな顔色をして

おいでなされます？ どうなされたのぢや？

セバス (王に) 貴下を警護しながら、私共が此處に立つてをりますと、つい今がた野牛が、いや、寧ろ獅子が吼るのかと思ふやうな凄じい聲が聞えました。それでお目が覺めたのぢやありませんか？ それがわたしには非常に怖しく聞えました。

アロン わしには何にも聞えなんだ。

アント どうして、化物だつても駭きさうな怖しい聲でしたよ、地震がいたすくらゐの！ ありや必然獅子の全群の唸り聲でありましたらうよ。

アロン ゴンザロ、お前さん聞きましたか？

ゴンザ 全くの所何かブン／＼唸るやうな妙な聲が聞えました、實はそれで目が覺めました。で私は貴下を揺りまして、お呼び申しました。目を開いて見ますと、お二人が抜劍していらせられました。……何か音がしたには相違ありません。兎に角御用心遊ばすがよろしい。或は、直ちに此處を立退きますか？ 兎に角劍を抜きませう。

アロン ともかくも此處を離れることにして、伴の行方を捜して見よう。

ゴンザ どうかさういふ猛獸なぞに、若君のお逢ひなさらぬやうに！ 此島にいらせられるには相違ないから。

アロン 案内してくれ。

みなく入る。

エリエ 主人のプロスベロにおれのしたことを知らせて來よう。……ちや、王さん、御機嫌よう息子さんを捜しに行つておいでなさい。

エリエル 入る。

第二場 島の他の方面。

カリバン、薪の大束を擔いで出る。雷の鳴る音が聞える。

カリバ

大陽が泥池や沼や澤から吸上げる毒のありつたけ、ブロスペロめに降りかゝつて、奴の身體中を病氣だらけにしてくれ！ 奴の精霊共めが聞いてゐやがるかも知れんが、呪はずにやゐられない。彼奴等だつて、奴が吩咐けなければ俺を捻つたり、小鬼の化物を見せて脅したり、沼ン中へ突落したり、化炬火なんか見せて眞黒闇の途に迷はせたり爲やアしないのだ。些少でも氣にくはんと、直ぐ俺を窘責めさせやアがる。無尾猿に化けて、齒

を露出して、キヤツ〜と吠えて咬附きやアがるかと思ふと、獺に化けて、行先に轉臥つて、針毛をおツ立て、俺の跣足の足の裏を刺しやアがる。かと思ふと、蝮に卷附かれることもある、奴め、二股の舌で以て、シツ〜と鳴きやアがるので、俺氣が狂ツちまはア……

奥にて王の替問役 トリンキユロの呼ぶ聲が聞える。

や！ おやア！ 奴の精霊めがやつて來やがったぞ。薪を早く持つて行かないから、責めに來やがった。平伏つてゐてくれう。さうすりや多分氣が附かないだらう。

カリバン 上被を頭からかぶりて地上に突伏してゐる。
替問役 トリンキユロ 出て來る。

トリン

雨宿りをする藪もなけりや灌木もないのに、又雷雨が來さうになつた。風の中でゴ〜ロ〜と嘯つてらア。あそこのあの黒い雲は、あの大きな奴は、



宛然穢い四斗樽だ、今にも腐り酒を傾
 瀉けさうだ。先刻のやうな雷がやつ
 て来るのだとすると、何處へ頭を匿し
 たら可いだらう？ あれ、あの雲は、桶
 をぶちあけるやうにやつて来るに相違
 ない。……(突伏してゐるカリバンを見て) やツ、
 こりや何だ？ 人間か、魚か？ 死ん
 でるのか、生きてるのか？……魚だ、魚
 のやうな臭ひがする。腐つてる魚のや
 うな臭ひだ。鹽大口魚の種類だが、決
 して新鮮しいのぢやないな。變妙來
 な魚だ！ 俺が今若し英國にゐるのな

ら、(一度往つたことがあつたつけが)此奴を書招牌に書いて出しときやア、
 お祭日のお馬鹿さん連中で、銀貨一個擲棄さないものは一人だつてありや
 アしまい。英國でなら、此化者が人間を作成へらア。彼國ぢやア、珍しい
 獸類さへ持つて行きやア、人間が一疋出來上るからなア。跛足の乞食なん
 か、強請つたつても、鏝一文もくれないけれども、死人の印度人を見るた
 めにや十文位棄てるのは何とも思はないんだ。……(つくつくカリバンを見て)
 人間のやうな脚だ！ さうして鱈が、何だか腕に似てら！……おや、温い
 ぞ！……あゝ、前説は放棄だ、今まで考へてゐたことは、お中止だ。こりや
 魚ぢやないや、此島の間人だ、それがつい今がたの雷に撃たれたのだ。……
 雷の音が近くなる。

やれ、雷雨が又やつて來た。此奴の上被の中へ潜り込むのが一番上策
 らしい、他にやア此邊に隠れ處は無いから。窮すりやとんだ不思議な相方

と同衾どうきんをするものだなア。雷雨うらいやが降止ふりやんちまふまで、此處こゝに纏くまつてゐよ
う。

カリバンの上被うはぎの中なかへ頭あたまから潜ひそり込む。
膳部ぜんぶ方かたステファノー、手に木の皮かわにて造りたる壘とりを持ち、酔よひた
る體ていにて、鼻唄はなうたを歌うたひながら出て來きる。

ステフ

(うた
へ歌ふ)

往ゆかぬ海うみへは、二度どとは海うみへ、

陸くわで死こうぞよ、このまゝ陸くわで……

こりや葬式さうしきに歌うたふ唄うたにしちや、少ちつと鄙臭けちくさ過ぎるわい。が、こゝに俺おれのお樂たのし
みがある。

と壘とりの酒さけを口移くちうつしに飲のみて、又また歌うたふ。

船長せんぢやうと雜巾方ざしきんかたと水夫長すいふぢやうと俺おれと

大砲係たいぱうががりと其助手そのじよしゆが、

モールやメッグやマリヤやマーゼを可愛いとがつたが、

だあれもケートを好すかなんだ。

それも其等そのはず、奴鼻腐やつはなくたで、

「どつつくさうめ！」と怒鳴どなりをる。

炭液たいりくの臭くさみや瀝青ちやんの臭におひは、

蟲むしが好すかぬと吐ぬかしをる。

奴やつを好すくのは裁縫師したてやで、

搔かゆがりや搔かいてもやりまする。

ぢやア、吾徒ごたらは乗出のりださうせ。

阿魔あまよ、あばよ、どつつくさうめ、あばよ!

これもやつぱり鄙臭けちくさい歌うただ。が、こゝに俺おれのお樂たのしみがある。

と又酒を飲む。此うちカリバンは這ひ込みたるトリンキユロをブ
ロスベロの使魔と思ひちがへて叫ぶ。

カリバ あゝ、責めるなく！

ステフ

(はじめて心附きて) どうしたんだ？ おや！ 悪魔が二疋もゐるのか？ や
い、野蠻人や印度人を品玉に使つて欺騙さうといふのか？ 汝の四本脚な
んかに恐怖えるために、溺死者になるのを助かりアしねえぞ。古語に曰く、
四本脚でお歩きになるやうな御様子の好いお方の爲には、決して退却せざ
るもの也ツて曰ア。憚ながらステファノさまは、かやうに鼻の穴で息を
していらせられる間は、決して退却は遊ばされんぞ。

カリバ

あゝ、精霊めが責めやアがる。 あゝ！

ステフ

あゝ、こりや此島の化者だ、四本脚の。そいつが必然瘡をふるつてゐるのだ。
どうして此奴おれの國の語をおぼえやがつたか？ 少し如何かしてやつ

て見よう、瘡をふるつてゐるばかりなら。此奴を本復さして、飼馴らして、
さうして本國へ伴れて行くことが出来りや、如何な柔革をお踏み遊ばす王
さんの許へだつて、立派な献上物にならア。

カリバ

もう堪忍してくれ、堪忍してくれ！ これからは速く薪を持つてくから。

ステフ

今が熱の出盛りと見える。たはいも無えことを吐かしてら。此酒を嘗め
さしてくれう。若し前に酒をくらつたことが無けれア、多分これで熱が降
るだらう。此奴を本復させて飼馴すことが出来れア、幾らにだつて賣れら
ア。買ひたいといふ奴があれア、うんとこさと出させなけりやならねえ。

此間トリンキユロは始終カリバンにしがみついてゐる。

カリバ

(少し静かになりて) 汝けふはまだねつから責めないけれど、必然今に始める
んだらう。それ、そんなに戦へてるのは、今あのブロスベロめが憑りかけ
てるんだ。

ステフ (覗き込みながら) こつちへ向け。口を開ける。やい、猫、汝に物を言はせる妙樂が此處にあらア。口を開け、口を。これを飲むと其戦慄が止らア。大丈夫止る。なア、何處に親友がゐるか、知れたもんぢやアねえ。顔をあげろ、もう一度。

トリン (上被の下から覗きて) おぼえのある聲だぞ。たしかにあの男の聲のやうだ……が……奴は溺死者になっちまつた筈だ。すると、こいつらは悪魔だ……あゝ、神さま、助けて下さい!

ステフ おや! 脚が四本で聲が二種だ。大變に様子の好い化者だなア! 前の方の聲は、どうやら友達のことを思つてゐるらしいが、後ろの方の聲は悪體もくたいを並べやアがる。此壘の酒だけで、奴の瘡が治るもんなら、試つて見よう……(カリバンに) さ。……もう止し! 汝の彼方の口の方へ注込んでくれるから。

トリン ステファアノ……

ステフ や、彼方の口が俺を呼んだやうだな! ……お助け下さいまし! お助け下さい! ……これア悪魔だ、化者ぢや無いんだ。俺は逃げよう、長い匙ア持合せてゐねえから。

トリン ステファアノ! ……お前が實際ステファアノなら、俺に觸つてくれ、さうして口をきいてくれ。おいらはトリンキュロだよ……畏怖るには及ばない……お前の親友のトリンキュロだよ。

ステフ 實際トリンキュロなら、出て來なよ。小さい方の脚を引張るぞ。もし孰ちかハトリンキュロの脚なら、此細ツこい方だらう……(トリンキュロの脚を捉へて引出す) お前はトリンキュロだ、成程。如何して如是な化者の寢臺なんかになつてゐたんだ? それとも此奴がトリンキュロを排出したのかり?

トリン 俺は、此奴は雷に撃たれて死んでゐるんだと思つてた。……それはさうと

ステファノ、お前溺死者にやならなかつたのかい？ ならなかつたと見えるねえ。雷雨は最早済んだのかい？ おいらア雷雨が怖かつたんで、此流産の塊りのやうな奴の上被の中へ潜り込んでゐたのだ。で、お前は、全く生きてるのかい、ステファノ？ おゝステファノ！ ちや二人だけネーブルス人が助かつたんだね、二人だけ！

トリン キュロ喜びの餘り、ステファノを抱擁して引張り廻す。

ステフ おい／＼、さうぐる／＼廻しちやアいけねえよ、胃袋が安固でないから。

カリバ (傍自) 彼等は、もし精霊でなければ、きつと何か立派な者なんだらう。……あれア必然偉い神様だ、天で出来た飲む料を持つてるんだ。彼れの前へ往つて、俺、平伏つてくれう。

ステフ お前どうして助かつた？ どうして此處へ來た？ さ、此處で誓言しねえ、え、どうしてこゝへ來たんだ？ 俺は船頭共が抛出した酒樽に乗ツかつて、

やつと助かつた、實のこつた、お塚さまも照覽あれだ！ 此塚ア木の皮を引

剥つて、俺の手で製へたんだ、陸へ上つてから。

カリバ (膝行して) 俺そのお塚さまで誓言するよ、俺これから汝の家來になつて忠義を盡します、其飲む料は天上で出来たのゝやうだから。

ステフ (トリンキュロに) こらよ。 どうして助つたんだ、よ、誓言しねえよ。

トリン 泳いだのさ、まるで家鴨のやうに。 實のこつた、誓言するよ。

ステフ さア、此お經文さまに接吻しなよ。……家鴨のやうに泳いだかも知れねえけれど、斯う見た所お前は鷺鳥の方に似てるぜ。

此中 トリン キュロ壺を受取りて酒を飲む。

トリン おゝ、ステファノ、こりやまだ別にあるのか？

ステフ うん、樽ごと全部。 俺の酒倉は海岸の巖中だ、そこに酒が匿してあらア。……(カリバンに) やい、どうした、流産の塊り？ 瘡は如何した？

カリバ

汝は天から墜落ちて来たのかい？

ステフ

さうだ、俺は月の中から来た、月の中から。俺は昔は月の中の人だつたんだ。

カリバ

おのしが月の中にゐるのを俺見たことがある。俺おのしを尊敬するよ。俺の許の娘が汝や汝の犬やお汝の柴の束を俺に見せたよ。

ステフ

さ、その通り誓言しろ、此お經文さまに接吻をして。今に俺が別のを持つて来て充換へてくれるから。さ、誓言しろ。

トリン

(笑ひ出して) ほんとに此奴ア薄ッぺらな化者なんだ……如是な奴を俺怖つてゐたんだ！ 浅劣い下等な化者！……え、月の中の人だ！……馬鹿正直に、虚誇を真に信けやがる化者！……

トリン キュロ 類に笑ふ。此中カリバン 壺を受取りて酒を飲む。よう／＼、飲口が見事だぞ化者。

トリン

ほんとに此奴ア油断のならない酒くらひの化者だ。神様が睡てる間に壺

カリバ

(ステファノに) 此島中の、物の善く出来るところは、一つ残さず俺おのしに教へようよ。それからおのしの足を嘗めようよ。おのし何卒俺の神様になつとくれよ。

を盗奪りかねないや。

カリバ

(ステファノに) おのしの足を嘗めようよ。俺おのしの家来になります。

ステフ

ちや、こゝへ来い。さ、平伏つて誓言しろ。

トリン

(笑ひ出して) 俺ア、此大阿呆の化者を見ると、可笑しくつて、息の根が止りさうだ。堪らない下等な化者ッ！ 殴り附けたくて耐へられなくなつて来た……

ステフ

さ、嘗めろ。

トリン

此奴が酔てゐなからうもんなら、打毆らすにやゐられないんだが……堪ら

ない化者ッ！

カリバ (ステファンに) 俺おのしに最ち好い噴泉を教へようよ。甘い木の果を取つて来てやらうよ。あ、魚も取つて来るよ、薪も澤山取つて来るよ。今俺を虐使つてやがる奴時疫に罹れアがれ！ 彼奴には最早柴一本だつても持つてつてはやらない、俺はおのしに従ふよ、おのし偉い〜不思議な人！
トリン 馬鹿々々しい化者もあつたものだ。下等な泥酔漢を偉い〜不思議な人

だと言やアがる！

カリバ どうぞ俺に案内させとくれよ苦林檎の生つてる處へ。それから俺南金豆を掘出してやらうよ、此長い爪で。樞鳥の巢も知らせようよ。あの敏捷いマーモゼ猿を捕ることも教へようよ。榛の實が累累してゐるとこへも、俺伴れて行かうよ。それから俺、巖の間から、鷗の雛を取つて来てやらうよ。おのし俺と一しよに来るかいい？



ステフ

ちや、もう饒舌るのは止めて、案内してくれ。……トリンキュロ、王さんも他の人達も悉皆死んだら、王さんも死んだら、此島は此方等二人の物だ。……(カリバンに) 此の壘を持つてけ。……(トリンキュロに) おい、友だち、今に此壘にもう一べい分充めてくれようなア。

カリバ

(歌ふ)

さよなら旦那さん。

カリバン 呂律も廻らぬ程に酔ひて踵跟きながら歌ふ。

さよなら、さよなら！

トリン

(笑ひつゝ)

化者が吠えてやがる。化者が爛酔てやがる！

カリバ

(歌ふ)

魚も漁りやせん、これからは、

薪も刈りやせん、これからは、

頼んでも。

膳も拭きやせん、皿洗やせん。

リップバン、リップバン、キャップキャリバンにや

親規の旦那が出来たから、

親規の家來を傭んなさい。

自由だぞ！ フラア！ 自由だぞ！ フラア！

ステフ

よう、化者、偉いぞ！ さ、案内しろ。

よろめきつゝ、歌ひつゝ、一同入る。

*
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

第三幕

第一場 プロスペロの窟の前。

フアーダイナンド丸太を肩にして運びつゝ出る。獨語の半に休む。

フアー 慰み事にも骨の折れるのがあるが、面白いので、骨折が償はれる。又、營み方によつては名譽となる下賤な仕事もある。で、大概の卑しい業が、存外立派な目的に歸著する。予の此淺ましい仕事とても、もし主人にしてゐるあの娘が、死んでゐる物にも生氣を與へ、辛い務をも快樂にしてくれなん

だら、嘸厭でもあり、苦しくもあるだらう。あの娘は、氣むづかしい父親に比べると、十倍も優しい生得ぢや。親父の方は慳貪の塊り、何千本といふ此丸太を、是非運んで積上げろといふ嚴しい吩咐ぢや。娘は予が働いてゐるのを見ると、泣いて、こんな卑しい仕事を貴下のやうな人がするのは初めてぢやといふ。……つい茫然してゐた。……が、かういふ嬉しい物思ひに耽つてゐると、疲勞も癒つてしまふ。惘然してゐる時が、予には一番忙しい時なのぢや。

又丸太を運びはしめる。ミランダ出て来る。プロスペロは遠く
にゐて、二人の様子を窺ふ。

ミラン あ、お氣の毒な！ そのやうに酷うお骨折なされますな。貴郎が積めと吩咐けられてゐなざる其丸太が、悉皆電の火か何かで焼けてしまへばよいものをなア！ どうぞ、それを下に置いて、休んで下され。其木が燃える

時分には、貴郎を苦めたのを思ひ出して、泣くであらう。父様は、今一心に調べ物をしてゐなされるから、さ、どうぞ休んで下され、これから三時間だけは大丈夫ぢや。

お嬢さん、有難うござりますが、吩咐けられた事を早く済さぬと、日が暮れてしまひます。

貴郎が休む間に、わたしがそれを搬びませう。どうぞ、それを貸して下され。わたしが積んで来よう。

めつさうな！ わたしが怠けて休んでゐて、貴嬢に如是な卑しい事をさせるくらゐなら、寧ろ此筋が断れ、此脊骨が折れた方がようござります。

貴郎が爲てよい事なら、わたしが爲てもよさうなものぢや。きつとわたしの方が安易にします。何故なれば、貴郎は厭々なされるのぢやが、わたしは嗜き好んでするのぢや。

プロス (傍目) いぢらしい奴！ 感染れをつた。斯うしてやつて来るのが其證據ぢや。

ミラン 酷うお疲れなされたやうぢや。

はい、え、疲れません。貴嬢が傍にゐなされれば、夜でも鮮かな朝のやうに思ひます。どうぞ、あの……お祈禱をする時分に、貴嬢の名を挿れて祈りたから……どうぞ、名を知らせて下され。

わたしの名は、ミランダ……あれ、父様、堪忍して下され、言ふのではなかつた。

ミランダ！ とは「微妙」といふこと！ なるほど、此上もなく微妙な、此世の中の如何な貴い物にも決して劣りさうにない娘御ぢや！ わたしは従来、随分多勢の婦人を心を籠めて観察もした、其美しい言葉の音楽に容易く耳を囚へられて、恍惚となつたことも屢々あつた。又種々の婦人に種

く々の取所のあるのを見て、好もしいとも思ひました、が、それらには、又何等かの缺點があつて、持前の美所を差引してしまふのが定例であつたに、貴嬢は、あゝ、貴嬢は、まつたく圓滿無類で、あらゆる人間の美しさばかりを取集めてゐなさるのぢや。

ミラン

わたしは自身と同じ性の者を一人でも知りませぬ。女の顔というては、鏡で見た自身の、他には記えてはをりませぬ。男とても、貴郎と父様の他には、見たことが無い。それゆゑ、餘所では人が如何様な顔をしてゐるのやら知らぬけれど、わたしの最ち貴重な此操を誓ひにして、わたしや貴郎より他の人に連添ひたいとも思はねば、貴郎よりも好きな姿は、想像するにとさへも出来ませぬ。……あゝ、つい父様の吩咐を忘れて、あんまり無作法に言ひ過ぎてしまつた。

フア

ミランダどの、わたしは、素性をいふと、王子、といふよりも、或は國王とも

なるべき身分の者であるから、(決してさうなりたくはないが!) 假にも此唇を蒼蠅共に汚さしめないと同じに、かういふ奴隷仕事を堪忍する筈はないのぢやが、貴嬢の姿を一目見ると……眞實の事……心が貴嬢の脚下へ飛んで行き、どんな御用でも務めようと望んでゐます。貴嬢を思ふと、丸太を運ぶのを決して辛いとは思ひませぬ。



ミラン わたしを可愛がつて下さるのかえり？

フアー お、天の神よ、地の神よ、只今わたくしが申す言葉の保証者とおなり下さりて、申すことに偽りの無い以上は、何卒恩恵を垂れさせられませ！ 萬一偽りならば、豫て定めおかせられたる私しの幸運をも悉く禍ひに轉せさせられませい！……わたしは此世界の有りとあらゆる物以上に、貴嬢をば、愛しもし、尊みもし、敬ひもする。

ミラン わたしは何といふ阿呆ぢや、嬉しいのに涙が出る。

ブロス (傍白) 世にめづらしい、清い、美しい二つの愛情の會合ぢや！ 神々よ、二人が將來に天恵を降したまへ！

フアー 何故お泣きなされるのぢや？

ミラン 此身が不束ぢやゆるゑに。獻げたくても、此方からは獻げられもせず、死ぬほどに欲しうても、そちらから貰ふ事は尙の事出来ぬゆゑに。……(傍白)あ

、しかし、こんなことを言ふのはたはいもないことぢや。隠さうとすればするほど、本心が見え透いてしまふ。羞しがる心よ、去つてしまへ！

眞直な、清淨い、罪のない心よ、わしを案内してくれ！……(フアーダイナンドに)

わたしは貴郎の妻ぢや、もし婚禮して下されば。でなければ、處女で死にます。正妻になることが出来ぬなら、侍婢になつてでもお傍にゐます、貴郎が何と言はうと。

フアー 可愛い、いとしい嬢さん！ この通り！

ミランダの前ミランダの前に跪ひざまづく。

ミラン ではわたしの殿御たかごか？

フアー いかにも。奴隷どれいが自由じゆうを得る時の喜びもこれほどではあるまい。……これが約束やくそくのしるしぢや。

手をさし延のす。

ミラン (握手して) 心も此手と一しよに……では、御機嫌よう。また半時間後に。

フアー 御機嫌よう！ 御機嫌よう！

左右へ分れて入る。プロスベロだけ残る。

プロス 思ひがけないので喜ぶ彼等ほどには、喜ぶことは出来んが、それでも曾て知らぬ嬉しさぢや……又例のを読まう、夜食前に種々肝要な事をしておかねばならん。

プロスベロ入る。

第二場 島の他の方面。

ステファノとトリンキユロと出る。カリバンは壘を携へて後につゞく。三人とも亂酔してゐる。

ステファ (トリンキユロに) だまつてゐる。いよ／＼樽が空になりや、水も飲まア。それまでは、決して飲まん。だから關はず進行しろ、乗込め／＼……やい、

化奴、子を祝つて飲め。

トリン (笑ひ出して) 化奴だ！ 此島の馬鹿々々しさツたら無いや！ 島中に人間は

僅々五人しかゐないツて事だ。其中の三人は此方共なんだ。もし残りの二人が、こちとらと同じくの頭加減と来てゐた日にやア、全國が踉々踏々だ。

ステファ (カリバンに) 飲め化奴、おれが飲めと言つたら。汝の目は、まるで脳天に据

附になつてゐるやうだなア。

トリン 脳天に据附けなくつて、何處へ据附けるね！ 目が尻尾にでも据附けてあ

つたら、それこそ素敵な化者が出来るだらう。

ステファ 化奴め、奴、酒をくらつて、舌が溺死者にでもなつたと見える。憚ながら、

予と来ちやア、海だつても、溺死者にすることア出来ねえや。予は岸へ著くまでに、三十五里も泳ぎぬいた、乗ツきつたり、流されたり、眞のこんだ。……やい、化者、汝は予の近侍役にしてやるぞ、でなければ太刀持だ。

此トタンにカリバン、壘を持つたまゝよるめきて倒れる。

トリン 成るべく近侍が可いよ。とても立ち持は出来さうにない。(と笑ふ)。

ステフ なア化君、何が来ようとも我等たちは、決して逃げたり、走つたりなんかしねえのだぞ。(と言ふうちによろめきてカリバンの上へ倒れかゝる)。

トリン 走るところか、歩くことも出来めい。犬のやうに平つくばつたつて、吠えることも出来ないや、呂律が廻らないから。(と笑ふ)。

ステフ (カリバンに) やい、流産の塊り、たつた一度だけ何とか言へよ、苟も立派な化者なら。

カリバ (廻らぬ舌で) おのし御機嫌好いかい? おのしの靴を俺嘗めようよ。けれど

も(トリンキュロを見返りて) あいつにや俺奉公しない。あいつは弱蟲だ。

トリン 嘘を吐け、物知らずの化者め。警察の役人とても決闘をする乃公だぞ。

やい、おのれ、圖部六になりやアがつた魚の化者め、今日おれが飲んだ程酒を飲み得る人間に、臆病者なんかがあつて堪るかいかい? 半分は化者で、半分は魚の癖に、人間並に人様の悪口なんか吐きやアがるない!

カリバ あれ! あいつめ、あんなに俺を馬鹿にするだに! (ステフアノに) おのし、

あれを放任ツとくか、殿さま?

トリン (笑ひ出して) 殿さまだと言やアがる! あいつはお化ではなくって大馬鹿だ!

カリバ あれ! また俺を馬鹿にしてる! あいつを咬殺しとくれよ、殿さま。

ステフ (物體ぶつて) トリンキュロ、注意して口をきけ。上官の命に背くと、直次の木だぞ。……化者は予の家来だ、侮辱を加へること相成らんぞ。

カリバ お殿さまア、ありがたう。……先刻おのしに頼みかけた事もう一度聴いてくれないか？

ステフ うん、聴いてやる。膝を突いて、もう一度言へ、予は立つてるから。トリンキユロも立つてる。

此時エリエル隠形のまゝにて出で、カリバン等の背後に立つて聴いてゐる。

カリバ 先刻言つた通り、俺は今慥食な奴に使はれてゐるんだ、そいつは魔法使ひで、俺の此島を通力で以て奪ツちまつたんだ。

エリエル (トリンキユロの背後にて) 嘘を吐け。

カリバ (怒りて、トリンキユロに) 汝こそ嘘をつけ、道化猿め。汝のやうな奴は、強い殿さまが叩き殺してくれ、ば可い。俺が嘘を吐くものかい。

ステフ トリンキユロ、以上あれが話の邪魔をすると、(手を出して)こら、これだ。汝の

向ッ齒を叩き折つてくれるぞ。

トリン (不平さうに) 何も言やアしないのに。

ステフ ぢや、口を結んでろ、もう何にも言ふな。……(カリバンに)後を言へ。

カリバ (膝まづきて) 全く魔術で奪つたんだ。俺のを奪ツちまつたんだ。もしおのしが其復讐をしてくれ、ば……おのしは強い神様だから爲得るけれど…… (トリンキユロを指さして) こいつは爲得ないや……

ステフ そりや無論だ。

カリバ さうすりや汝を殿さまにして、俺は家來になる。

ステフ どうしたら其目的が遂げられる？ 汝子を其輩の處へ案内することが出来るか？

カリバ うん、出来るとも。よく眠てるところへ伴れて行くから、彼奴の頭へ針を打込むことも出来らア。

エリエ (トリンキュロの背後にて) 嘘を吐け。出来るもんか。

カリバ 何て馬鹿幫間だ此奴? うぬれ、三文幫間め!... 殿さま、お願いします。

あいつを殴つて下さい、さうして酒壇を取上げて下さい。あれがなくなりやア彼奴海水の外に飲むものがなくならア、清水の出るとこなんか教へてやりやしないから。

ステフ トリンキュロ、此上行ると危険だぞ。此上一言でも化者の邪魔をして見ろ、

(手を出して) ころ、これだぞ、一切お慈悲はさらんばんだ、汝を干鱈のやうに叩き挫いてくれるぞ。

トリン (呆れて) あれ! おれが何をしたね? 何もしやアしないのに... もつと離れておよう。

ステフ 嘘を吐けと言つたぢやアねえか彼れに?

エリエ (トリンキュロの後ろにて) 嘘を吐け。



ステフ (怒りて、トリンキュロに) 何? おれが嘘を吐くり?... これを喰へ。

(トリンキュロを殴つ)...これが欲しけりや、いつでも予に對つて嘘吐きだと言へ。

トリン (不平さうに) 嘘吐きだなんて言やしないよ... 正氣がなくなつて、耳までも無くなつたのかい?... 畜生! みんな其塚の所爲だ! こりや全く酒の祟りだ... 化者奴め、微菌にとツつかれアがれ! あゝ、痛い!

注意しなよ。

カリバ もう半時間も経つと、彼奴は眠るだらうが、その時おのし彼奴を殺すか
い?

ステフ うん、殺す、大丈夫。

エリエ (以上の問答を聴了りて) この通り師匠に知らせよう。

カリバ (浮れ出して) あゝ、俺、面白くなつて来た。嬉しくツて堪らないや。なア、お

い、浮れようよ。先刻教へてくれた地口り歌で奴を歌はうよ。なア、おい。

ステフ 化者、汝が頼むと言やア、何でもしてやる。苟も道に合つた事なら、……横

道であらうが、間道であらうが。さあゝ、トリンキユロ、歌はうせ。(歌ふ)。

馬鹿に爲い。阿呆に爲い。

思ふのは自由だ。

代るく口調の同じやうな文句の異つた歌を同じ旋律にて歌ふ。

文句が一々地口になつてゐるのを地口り歌といふ。

カリバ (トリンキユロに) おのしは調子ツ外れた。

此時エリエル小鼓と笛とを奏して歌に合せる。ステファノとトリ

ンキユロとは驚きて空を見上げる。

ステフ や、ありや何だ?

トリン あれア此方等の地口り歌の調子だせ。のツべらばうの化者が合奏せてる
んだ!

ステフ やい、うぬ、もし人間なら人間らしい面を見せろ。が、もし悪魔なら勝手に
しやがれ。

カリバ (慄へ出して) あゝ、お赦し下さい、どうぞ罪をお赦し下さい!

ステフ (わざと威張つて) 死んぢまやア何もかも帳消だ。何をうぬ、さア来い。(俄
に慄へ出して) おゝ、お助け下さいまし!

カリバ (呆れてステファノに) おのし怖つてるのか?

ステフ うんにや、予ヤ怖つちやゐない。怖らなくても可いよ。此島に

カリバ ア常住音がしてゐて、いろんな聲や美しい音色がするけれども、どうもしやアしないや、只面白



るやうな人の聲が聞えることもあらア。さうしていつの間にか夢を見てゐると、空の雲が徐々に開いて、いろんな寶物が今にも頭の上へ墮落ちかゝるやうになるんだ、で俺目が覺めると、嗚呼、もう一度夢が見たいッて叫

ステフ こいつア素敵な王國だわい、王さまは無代で以て音楽が聞かれる。

カリバ プロスベロさへ殺してしまやアね。

ステフ 今にやッつけてくれる、汝の言つたことア忘れやしねえよ。

エリエルの奏する音楽だんくに遠くなる。

トリン 音が徐々に遠くならア。ま、尾いてツて見よう。仕事は其後にしよう。

ステフ 化者、さ、先へゆけ、おいら達も後から行くから……(空を見上げて)あの鼓を鳴らしてやがる奴の面が見てえなア。頻に鳴らしてやがる。……おい、来るかい?

トリン あゝ、お伴するよ。

皆入る。

第三場 島の他の方面。

アロンゾ、セバスチャン、アントニオ、ゴンザロ、アドリヤン、フランシスコ等出て来る。

ゴンザ もう逆も手前には歩かれませんが。此老骨が痛みます。いや、實に、八重樫とも蜘蛛手とも申しやうのない奇怪な路を迷ひ歩きましたわい！ 御免を蒙つて、休息をいたさねばなりません。

アロン 老卿よ、道理ぢや、予とても精神が鈍つてしまふほどに疲れたわい。腰を下して休むがよい。つい今がたまでは、よもやと思つてゐたが、もう予

は断念めます。斯うして尋ねさまようても、彼れは疾うに溺死したに相違ない。海めが役にも立たぬ陸路の搜索を笑うてゐる。あゝ、是非に及ばん。アント (セバスチャンに傍目) 結構です王が絶望せられたのは。一度やりぞこなつたからといつて、一旦決心なすつたことをお止めなすつちやいけませんよ。

セバス 好い機會の有り次第にやつつけようよ。

アント 今夜がよろしい。歩いて疲勞れ切つてゐますから、精神の活潑な時ほど目敏く用心をしますまいし、爲ようとしたつても出来ませんよ。

セバス 今夜に限る。もう黙つて。

此時嚴肅にして奇異なる音樂俄に聞え來る。

アロン や、これは如何した音樂ぢや？ あれをお聴きなさい！

ゴンザ さてく不思議な愉快な音樂でござりますわい！

プロスベロ 高き處に現はれる。アロン等には見えぬ體なり。種

種の奇怪なる妾の者、饗宴の準備を整へたる一の食卓を運びつゝ出て来りて、馴雅なる態度にて頻に會釋を行ひつゝ、食卓を廻りて舞ひ踊り、王等一同にむかひて、いざ飲食せよと誘ふが如き科介をなして消え去る。

アロン 神々よ、何卒お護り下さりませい！……何であつたらう今のは？

セバス 操り偶人の活きてるのでさア。これで見ると、麒麟とかいふ靈獸も、或は

實際有るのかも知れない。アラビヤには鳳凰木とかいふ樹が有つて、現に一疋の鳳凰が該樹に君臨に及んでゐるかも知れない。

アント わたしは双方とも信じますね。かうなつて来ると、従来信せられなかつた

事までも、わたしは事實だと言つて保證する方へ廻りますよ。旅行家連の話は嘘ぢやありませんね、井中の蛙だけが疑つて彼れ此れ言ふのです。

ゴンザ ネーブルスへ歸つて、此通り報告しましたら、斯うくいふ島人を目撃し



フロス

(高き處に立ちたるまゝにて傍白) 君子人よ、よう申された。現に其處

たと申したら、國の者が信じませうか？ 大丈夫只今のは此島の野蠻に相違ありませんが、彼等は姿態こそ化者めいてをりますけれども、中々禮儀は心得てをるらしうござりました、却つて吾々人間仲間には、幾らも、どころではなく、一人として無作法でないものは無い位でござります。

にゐる者の中にも、悪魔以上の奴がゐるからなう。

アロン 驚き入つたことちや、更に舌を動かさんで、其無言の中に、一種の巧妙な言葉を發しをつた。あの姿態、あの科介、あの物音、實にどうも驚き入つたことちや。

ブロス (傍白) お歸りがけにお褒めなさるがよろしい。

フラン 奇怪な鹽梅に消えてなくなりました。

セバス 關つたことはない、肝腎の食物を残していつたから。恰ど肚が減つてゐるところだ……(王に) こゝにある物を召食りませんか？

アロン 予は食はん。

ゴンザ いや、御懸念遊ばすには及びません。手前共が子供であつた時分には、野牛のやうに、喉に胴亂然たる肉の塊りを垂下げてゐる山の住民があるなぞと申したとて、誰れも眞實には致さなかつたものでござります、或は、胸元

に頭の附いてゐる人間があるなぞと申したからとて。ところが、今日では、それが、例の五倍利の賭をする手合が、めいゝ立派に其證據を持歸り得る事なのでござります。

アロン 覺悟をして食ひませう、これが最後であつても關はん、望みは絶えてしまふたのちや……おとうと、公爵どの、さ、その積りで、予と一しよに食れ。

雷光がして雷が鳴る。エリエル、頭と體とは女、四肢と翼とは驚と見ゆる一妖怪となりて出て、食卓の上へ飛び下りて、羽ばたきをする。と巧みなる装置にて、饗宴の品々が消滅する。食卓だけ残る。エリエル其上に突立ちて白をいふ。

エリエ 罪業の深い三人の徒輩、此下界をも、其有情非情をも、賞罰の用具にお使ひなされる運命の神が、此たび汝等をば、幾ら呑んでも飽くことを知らぬ海に吩咐けて、わざと人の住まぬ此離れ島へ、吐き出さしめたまうたのだ、汝等

は人間界に生かしておくには不適當な奴等だから……

アロンゾ、セバスチヤン等劍を抜きて切りかゝらうとする。それを見て冷笑して

どうだ、とうとう狂人にしてくれた。恰どさういふ向う見ずの自暴自棄から、人間はわれとわが身を縊つたり、又は溺したりするのだ。此の阿呆めらが！ 予や予の仲間の者は運命の神の使はしめた。金屬を鍛つて製作へた劍なぞで、おれの此翼の柔毛一つでも切滅すことが出来るものなら、それで斬る眞似をして、見事、吼え猛る風にも痛手を負はせ、曾ぞ傷を受けたことのない水をも殺すことが出来よう。おれ達は、風や水と同じに不死身だ。よしんば汝等が害を爲し得るにしても、もう汝等の力では其劍が扱へなくなつてゐるわい。見ろ、もう重くつて舉げられやしまい。……併し忘れるな、(これが汝等への予の用だ)、汝等三人が、ミラン國から彼の善良な

ブロスベロを逐出して、海へ曝し者にしたことを忘れるな、ブロスベロと其頭はない幼兒を。その報いが今度の難船だ。その非義非道を、神々は一時御猶豫はなさつても、決してお忘れはなさらないから、すなはち海を、陸を、一切の生物を憤激せしめて、斯様に汝等をば苦しめたまうたのだ。やい、アロンゾ、其方の倅を奪はせられたのも神々の御所爲だ。さうして神々は、予に吩咐けて、一思ひに死ぬよりもすつと辛い半死半生の苦しみが、將來始終汝等の身に附随ふといふことをお告げになる。その神罰を……此荒れ果てた孤島で、必ず汝等の頭の上に落ちかゝる其神罰を……まぬがれる道は唯た一つだ、眞情からの悔恨と將來永き清淨の生活、それより外に道はないぞ。

白了ると、エリエル雷鳴中に消え去る。同時に靜かなる音楽につれて、先刻の怪しき姿の者共また出て來り、口を歪め齒を

露出したなどして踊り廻り、残しありし食卓を運び去る。

ブロス (傍白) エリエルよ、妖鷲に假装した手際は見事であつたぞ。饗應品を一口に貪食ふ様子も手際であつたわい。言へと吩咐しておいたことも、脱さずに善う言うた。下役の奴等までも、十分に身を入れて、よう役々に注意して、それ／＼の務めを爲遂げをつた。おれの神術が功を奏して、然みある奴等が悉く狂氣の體ぢや。此奴等は最早おれの掌の中にあるのぢや、しばらく此儘にしておいて、彼等が溺死したとばかり思つてゐる彼の青年と我兒との様子を見て来よう。

ブロス、ペロ高き處より去る。アロンゾ、アントニオ、セバスチヤンの三人は精神錯亂したる體。ゴンザロ以下は常態に異なることもなきゆゑ、三人の様子を驚き異しむ介表情をなす。

ゴンザ これ／＼！ なせまア其様に、きよろ／＼と見廻してばかりおいで遊ば

されまますり。

アロン あゝ、どうも、奇怪千萬なことぢや！ 奇怪千萬なことぢや！ どうやら海が物を言うて、彼の事の怨を言うたやうであつた。それから風も、ヒュー／＼と鳴る間に、あの事を言うた。それから雷が、あの太い、怖しい聲で、ブロス、ペロの名を呼んで、わしの罪惡を物凄い聲で罵つた。いよ／＼伴は海底の泥に埋没れたに相違ない。わしは最早、測量鉛が達かん處までも探つて行つて、伴と一しよに泥に埋没れてしまひたい。

アロンゾ泣く／＼入る。

セバス 一時に一疋づゝなら、惡魔が何千疋來やがつても、敵手になつてくれる！
アント わたしが助太刀をする。

半狂亂の體にて二人とも入る。

ゴンザ 三人ながら氣が狂うてゐる。時が経つてから利くやうに宛はれた毒藥と

同じに、過去の大きな罪悪が、今になつて彼人達の良心を咬み始めたのぢや……（アドリヤン等に）願ひぢや、足腰が達者な貴下がたは、大急ぎで後を追ひかけて、とめて下さい、氣が狂つてゐなから、何をなさるやら知れたことでない。

アドリ
貴下も後から来て下さい。

アドリヤン、フランシスコ先に、エンザロも其後に従きて入る

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

第四幕

第一場 プロスペロの窟の前。

フロスペロとファードイナンドとミランダと出て来る。

フロス
お前さんに對する子の所置は、或は嚴酷し過ぎたかも知れんが、これで償ひが附く……予は子の命の絲とも、生きてゐる爲の目的とも思つてゐるものをお前さんに獻げたのであるから、それをば今また改めてお渡し爲ます。いろく苦しませたのは、愛情の深淺を試さんが爲であつたが、不

思議に善う其試験にお堪へなされた。こゝに天に誓うて、此貴重な我兒を、お前さんに贈ります。あゝ、ファーディナンド、どうぞ、予が自慢を笑うて下さるな、どのやうに讃めて見ても、尙讃め足らん程の女ぢやといふことが、今にお解りにならうから。

ファー

わたしは貴下のお言葉を信じます、神託に反対しても。

ブロス

では、わしの贈物として、又貴下にそれだけの徳があつて手に入れられた物として、我兒をばお取りなさい。併しながら、もしも神聖な結婚式を、まだ式通りに行はんうちに、萬一にも我兒が帯の處女結びを縦まにお絶ちなさるやうなことがあると、神々は、此婚約を生長させるために、決して甘露をお降しなさることはあるまい。いや、夫婦互ひに相憎み、相侮蔑んで、和合せず、子は生れず、聞は宛然嫌はしい雑草の叢とも思はれて、共寝をするを厭がるやうになるであらう。それゆゑ、結婚の神が華燭をお照しになる

までは、きつと注意なさい。

ファー

わたしは、目下通りの愛情を持續して、平和と長命と良兒とを得たいと希望しますから、どんな都合のよい眞暗な洞穴なんぞがありまして、わたしの悪い方の魂が如何な強い誘惑を掛けませうとも、此廉恥心を決して邪淫の爲に溶されるやうなことはありません。其正式の結婚日の樂みを、あゝ、けふは日神の駒が負傷でもしたのか、或は「夜」が、下の世界で、金縛りにでもなつたのかと待疲れる其正式の日の樂しみを、決して空にするやうなことはありません。

ブロス

立派にお言ひなされた。では、其處にゐて、我兒とお話なさい。此女はお前さんの有ぢや……(空に向つて) やい／＼、エリエル！ おれの忠僕のエリエルはゐるか？

エリエル出て来る。

エリエ お師匠さま、御用でござりますか？ こゝにをります。

ブロス 汝も汝の下役共も、先刻は吩咐けられた務を立派に爲果せた。そこで、も

う一つ仕事を吩咐けんければならん。さ、通力を汝に授けるから、一群の者を此處へ連れて来い。活潑な操り踊りをさせろ、此若い二人に予の妖術の幻影を見せてやらねばならんから。豫ての約束で見たがつてゐるのぢや。

エリエ 只今！

ブロス さうぢや、直に。

エリエ 「さア来い」というて、まだ二つとは息をなさらんうちに、どいつにも、足を爪立て、口を曲げ、齒を露出させ、ちよろ／＼走りを見せて、やつて来させます。お師匠さま、わしを可愛がつてくださりますか、え？

ブロス うん、可愛い奴ぢや。おれが呼ぶまでは出て来てはならんぞ。

エリエ 承知しました。

エリエル 入る。此間ミランダとファータイナンドとは一隅に退きて、暗じげに顔に何事か私語してゐる。

ブロス (やゝ不安げにファータイナンドを見返りて) 忠實に守りなさいよ。情の手綱をあんまり緩め過ぎてはならん。極めて堅い誓言も、血氣の焰に煽られると棄しべも同然ぢや。もつと節して、節して。で無いと、先刻の誓言は、おさらばになつてしまふ！

ファア 大丈夫でござります。わたしの心の臓の、雪よりも冷たい操が、わたしの肝の臓の熱血を消してしまひます。

ブロ よろしい。……(又空に向ひて) さ、来いよ、エリエル。有り餘る程連れて来い、一頭でも足らんよりは。現れろ、速かに！……(ファータイナンド等に) 無言で。目ばかり。黙つて！

静肅なる音楽が聞えて、程なく假面劇がはじまる。ジュノーの神に使ふる彩虹の化身アイリスといふ神に扮したる妖精出て来る。アイリスは傳令を職とする使ひ神なり、こゝはジュノーの命を受けて大地の神シーリーズを呼び出しに天降れる體なり。以上三體とも女神なり。

虹の神

シーリーズよ、豊にも物恵ませます姫神よ、小麦、裸麥、大麥、燕麥、豌豆、蠶豆の、其富饒なる圃をば立離れて、羊らの徐ろに食む其草の生へる山々を、其羊飼ふ爲にとて、茅もて屋蓋葺ける牧場々々を、又濕りがちの四月が、貴女の命によりて、處女神が頭挿の花を生長つる畦形の堤をも、思ふ女子に棄てられし獨男の立寄ることを好む帚木の柱をも立離れて、桂に蔓纏ふ其葡萄の園をも立離れて、貴女が平生休らひたまふ其荒れたる岩山の岬をも立離れて、疾う此處へ渡らせまして……大空の水にて作れる弓形門にても

あり、大妃神の御使にてもある此アイリスが宣り告す……厳しき彼の妃神と共に、此芝生にて、此處にて、いざや遊び戯れたまへと白す。神御者の孔雀は、今し翔ること矢よりも疾く侍り。豊かなる地の神よ、疾う出で來まして、彼の妃神の御歡待をばせさせたまへ。

大地の女神、シーリーズに扮したるエリエル出る。

地の神

めづらしや、ジュピターの妃神に忠實に仕へたまふ許多色の御使ひ神よ、…或時は蕃紅花色の翼廣げて、妾が花共の上に甘露做す心地よき雨を降らせたまひ、又或時は其青き眞弓を茂山、禿山に張渡して、妾が誇りなる大地の上に妙なる頸飾を掛下したまふ御使ひ神よ、……貴女の仕へます妃神が、妾を此芝生へ召させたまひぬる仔細は如何に？

虹の神

偽り無き戀の誓約を祝賀したまはん爲なり。幸多き其戀人等に許多の引手物を賜らん爲なり。

地の神

いかに、天の弓形の君、貴女は必ずや知りてぞおはさん、かのギーナスか若しくはその旨の童か、今も尙ジュノー君の御傍に侍るや？ あの母子の計略にて、わが愛女のプロセルバインを、彼の烏婆玉のデイスの神に奪られてよりこのかた、妾はあの賤しき二神とは、かりそめにも面をば合すまじと誓ひぬ。

虹の神

いな、あの女神に逢ひたまふことはあるまじうこそ。妾、彼神が雲を切りて、その子キュービッドと共に、鳩車に乗りて、バフスへ赴くをば途の程にて見つ。彼等最初は、結婚の神がまだ花燭を照さぬうちに、あれなる若人と處女とをば誘惑さん心なりしが、二人はよく誓ひを守り、道を守りて、其效のなかりしかば、軍神の彼の淫なる情人は歸り去りぬ。いらだち易き其兒さへも、残りなく箭を摧きて、最早弓は執らじ、今よりは尋常の童となりて、雀らと戯れ遊ばんと誓ひ侍り。

地の神

(空を見上げて) こよなき妃神の大ジュノーこそ渡らせたまふめれ！ あはれ、

おんけはひにて著明し。

ジュノーの神に扮したる妖精孔雀の牽ける莊麗なる輦に乗りて、中乗やうの装置にて高き處より出て來る。

ジュノー

わが豊かなる妹神は如何に在すぞ？ いざ、われと共に、此二人が彌榮えに榮えて、子寶にも幸の多からんことを祈りたまへ。(歌ふ)。

譽れ、富妹脊の幸、

永き壽命、果を知らず、

盡きぬ歡びの日々にあれと、

ジュノーが祝うて歌ふなり。

實る物は、年毎に、豊かにあれ、

納屋にも満ち、穀倉にも物満ちて、

葡萄の果は、鈴の如くに房を垂れよ。
木果の樹は、荷を重み、枝もたわむに、
春は毎に、收穫秋の末には来よ！
缺如と乏しさとは、曾て来らじ。
あはれ、地の神の恵み然く有れかし。

此歌終るとフアーディナンドは覺えず驚歎の聲を發する。

フアー

何といふ立派な莊嚴な幻象ぢや！ 美しくいとも何とも言ひやうのない
不思議な音楽ぢや！ これが精靈なのでござりますか？

プロス

精靈ぢや。わしの法力で、當座の思ひ附を演せさせるために、それらの
居所から呼出したのぢや。

フアー

わたしはいつまでも此處にゐます。かういふ不思議な通力を具へられた
舅御と斯ういふ世に稀な妻とを持つてゐれば、此處は取りも直さず樂園で

ござります。

此時ジュノーと地の神と何事か耳語することありて、虹の神に
命を含める科介をなす。プロスハロはそれを見てフアーディナンド
を制する。

プロス

あゝ、静かに！ ジュノーと地の神とが、何か事ありげに、耳語をしてゐる。
まだ何事かあるらしい。叱！ 黙つたり。で無いと術が破れる。

虹の神

(前へ進みて舞臺の一隅に向ひて) なうく、曲り河のネーヤッドと呼ばれたまふ女
神達よ、……葦の葉の冠かぶりて、いつも罪無げなる面持して在す女神達
よ、……小波の皺む水の面を暫し離れて、此芝原に來まして、ジュノーの君
の嚴命をば拜奉みたまへと白す。いざや、淨かなる女神たちよ、疾く來ま
して吾等と共に、偽りなき戀の誓約をばことほがせたまへ。……

江河の女神群に扮したる若干の妖精等、此呼出しに應じて

舞臺の一方より出て来る。虹の神は、舞臺の他の一隅に向ひて、更に又下の如くに呼ぶ。

なうく、心たゆむ秋の日に、日焼けしたる草刈男等よ、いざや、畝を離れて、疾くこゝへ来て、面白う一日を遊びさふらへ。おのく、麥藁の帽を被りて、あれなる嫩若き女神達と共に、手に手を取りて、鄙の手振を踊りさふらへ。

女神群とは反對の一隅より、草刈男と化現して、相當の服装したる若干の妖精等出て来り、舞臺中央にて女神群と一しよになりて、優雅なる幾番かの舞踏をなす。其舞踏の末頃に、なりて、プロスペロは急に心附きたることあるらしく、唐突に獨語する。

プロス (傍自) あ、つい忘れてゐた、あのカリバンの獸類と其一味の奴とが、おれを殺さうとしてゐることを。もう恰どやつて来る時刻ぢや。……(精靈等に) 出来

たくく!……(聲を荒くして) ひつこめ!……もうよい!

奇異なる物すごき、あわたしげなる騒音につれて、一同悉然として消去る。

フアー これは不思議ぢや。父上は何か甚う腹を立てゝゐなさるやうぢや。

ミラン つひぞ今日までは、あのやうに父様が取亂して怒つてゐなさるのを見たことはない。

プロス あゝ、婿どの、きつう駭いて氣を揉んでゐなさるやうぢやが、何も心配には及ばん。餘興はもう濟んだのぢや。あの俳優等は、豫て話しておいた通り、みんな精靈ぢやによつて、空氣の中へ、薄い空氣の中へ、溶け込んでしまつた。あゝ、此幻的の、礎もない假建物と同じやうに、あの雲に冲る樓臺も、あの輪煥たる宮殿も、あの莊嚴なる堂塔も、此大地球其者も、いや、此地上に有りとはあらゆる物一切が、やがては悉く溶解して、今消去つた彼の

幻影と同様に、後には泡沫をも残さぬのぢや。吾々は夢と同じ品柄で出来てゐる、吾々の瑣小な一生は、眠りに始まつて眠りに終る。……婿どの、わしは少し頭の具合がわるい、堪へて下さい、老人の持病ぢや。決して予の持病を氣にして下さるな。何なら、窟へ入つて休息してゐて下さい。わしは、心を鎮める爲に、一廻り二廻り歩いて来るから。

ミラー
どうぞお大事になされませ。

（ファードイナンドとミランダとは窟へ入る。）

ブロス
（空に向ひて）さ、来いよ、早く！……（ファードイナンドの行く方を見送りつゝ）ありがたう。……（又空に向ひて）エリエル！

エリエル 出て来る。

エリエ
お命令の通りに何でも致します。何御用でござりますか？

ブロス
精霊よ、カリバンめに應對する準備をせにやならんぞよ。

エリエ
さやうでござります。地の神の役をしてゐました時、その事を言はうかと思ひましたが、お怒りなさらうかと思つて、言ひませなんだ。

ブロス
あいつらを何處やらに置いて来たといつたな？

エリエ
彼奴等は酒を飲んで、酔うてゐると申しましたつげが、偉い元氣でござります、何故面へ吹附けると言つて風を撲いたり、何故足の裏を嘗めると言つて地面を殴つたり致します。それでも悪陰謀は忘れません。で、わたしが小鼓を鳴しますと、彼奴等は宛然騎馴らしてない仔馬のやうに、耳をおつ立て、目蓋を上げ、音楽を嗅がうとでもするかのやうに、鼻までも持上げます。さうして耳が悉皆狂うてゐるので、彼奴等は、母牛を慕ふ仔牛のやうに、わたしの聲に引きずられて、荆棘や針エリシダに柔い脚を刺されるのも關はず、尾いて來ました。とう／＼此窟の彼方の、あの青ぶの満つた池の中に……彼奴等の臭い穢い足にも負けぬほどに臭い池の中に……

首つたけ漬つたまゝで残して來ました。

プロス 出來した、うい奴ぢや。もう少しの間他には見えん姿のまゝでゐろ。奥へ往つて、金びか物をこゝへ持つて來い、盜賊共を捕捉へる囪に使ふから。

エリエ はい〜。
エリエ 窟の中へ入る。

プロス 惡魔ぢや、生得の惡魔ぢや、どう教へて見ても其性を改めることが出來ん。おれの仁愛の骨折も悉く無益であつた、全く無益であつた。齡と共に、肉體が醜くなるにつれて其根性までも腐り蝕む。……三人とも唸り叫くほどに苦めてくれう。……

エリエ 燦爛かなる衣裳を夥しく肩にかけて奥より出て來る。
さ、それを此木に懸ける。

エリエ 窟に近き菩提樹の枝々に衣裳を懸け並べる。準備了

ると、プロスバロとエリエルとは隱形の術を行つてゐる。

カリバン、ステファノ、トリンキユロ、三人とも尙酔ひの醒めざる體にて泥水に濡れしよばたれ、穢き物など夥しく身に附きたるまゝにて、跟踪き〜出て來る。

カリバ おい〜、そつと踏みなよ、土鼠にだつても足音を聞かれないやうに。もう窟へ來たんだからよ。

ステフ 化者、汝は、精靈は何にも悪いとア爲ねえといつたが、奴、俺達を随分ちやうさいばうに爲やアがつたぞよ。

トリン 化者、俺は身體中馬の小便臭くなツちまつた、で以て乃公のお鼻は、非常に

ステフ お逆鱗だ。
俺の鼻だつて然うだ。やい、化者てばり。 若し俺が汝に對して、お立腹遊ばしたりといふと、……見ろ……

トリン うぬの首は其肩に附いちやゐねえぞ。

カリバ 殿さま、どうか、さういはんで、もう少との間ア忍耐してゐておくれよ、今に俺が好い物を奪つて来てやるから、さうすると今までの事ア忘れツちまふから。だから、大きな聲しないで。……(四方を見廻して)まるでまだ夜中のやうに閑としてゐら。

トリン 何かなんでも貴重な酒壺を池の中へ落下してしまふなんてのは……

ステフ 恥や不名譽を受けたばかりぢやアねえぞ、化者、此方共アおツそろしい損害を蒙つたのだぞ。

トリン すぶ濡になつたばかりだとは言はせないぞ。それでも汝の許の精霊は、悪い事をしないか？ やい、化者。

ステフ 俺ア往つて、あの壺を取つて来よう、耳まで潜つたつて關はねえから。

カリバ おい、王さま、静かにしとくれよ。御覽よ、これが窟の入口だに。音をさ

せないでお入りよ。さ、好い悪い事をしとくれよ、さうすりや此島は永久も汝の物になるから、さうして俺は汝の家來になるから。

ステフ さ、手をよこせ。(カリバンと握手して) 残酷なことをやつつける氣になつて来たぞウ。

此中にトリンキユロ菩提樹の枝々に懸けてある金びかの衣裳を見附ける。

トリン おゝ、王さんく、ステファノ！ おゝ、おッ殿さんと言やがら！ おゝ、お立派なステファノ様々々だ！ 御覽なさい、こりや素敵なお衣裳部屋でございますよッ！

木に立寄りて一二着を取下さ。

カリバ うつちやつときなよ、馬鹿。そんなものアつまらん。

トリン おほッ、化者ッ！……へん、かういふお古さんが、うんと物になるんだい、

……お、どうです、ステファノ陛下！

と其一枚を着用しようとする。

ステフ それア此方へよこせ、トリンキユロ。それは是非俺が被る。

トリン へい、さしあげます。(と渡す)。

此中カリバンは呆れて二人の様子を見てゐる。

カリバ

(トリンキユロに)水腫にでも罹りやがれ、此馬鹿！ 如是な下等な物に目くらんで如何するんだ？ 先へ人殺をしなよ。彼奴が若し目覚ますと、頭から足の先まで、俺達の身體中を抓つてふくれあがらしてしまふから。

ステフ

静かにしろ、化者……(木に向ひて)え、菩提樹さま、これは手前の下被ではございませんか？ ……(と一枚の下被を取下して)下被は好きなり御意はよし。おツと、もう一枚お重ね、とは如何だ？

トリン

ようく！ 盜賊さまのお通行だぞ、下被々々！ 下被取らう、とは如何

でございませう？

ステフ

有りがたい、うまい洒落だ。(又一枚取下して)褒美に之を遣す。聰慧な奴には、是非賞を與へなけりやならん、俺が此國の王である以上は。下被々々、下被取らうはよかつた。(又一枚取下して)さ、もう一枚褒美に遣る。

トリン

やい、化者、汝もこゝへ来て、此木から衣服を悉皆に取去つてけ。俺はそんなものア取らない。うかくしてると時が経つて、今に皆な馬鹿

ステフ

アな雁の鳥にされツちまふ、びしやんこ額の尾無し猿にされツちまはア。やい、化者、手を借せ。これを俺の酒樽の在る處へ手傳つて持つてけ。持つてかんと、俺の王國から逐出しツちまふぞ。え、持つてけといふに。

トリン

これも持つてけ。

ステフ

さうだ、これも。

だしぬけに獵師等が獵犬を使喚する時の叫び聲が聞える。

種々の精霊が種々の猛犬に化現して駈け出て来りて、ステファノ等に襲ひかゝる。三人は狼狽して逃げ廻る。プロスベロとエリエルとは獵犬を喚びて三人を追ひ惱ます。

プロス　　へい！　　マウンラン！　　へ

いい！

エリエ　　シルヴァ！　　そらア、そらア！

シルヴァ！

プロス　　フューレー！　　フューレー！　　そ

らッ！　　タイラント！　　そら



ッ！　　おしッ、おしッ！……

カリバン、ステファノ、トリンキュロこけつまるびつして逃げ入る。

(エリエルに) さ、魑魅共に吩咐けて、彼奴等の五體の節々を、石臼で挽き摧くやうに、激しく痙攣させろ。奴等の筋肉を、まるで老病者のやうに引釣らせろ。奴等の皮膚の色を豹や山猫のやうに紫斑にしろ。

エリエ　　あれ、あんなに吠えてゐます！

プロス　　しつかりやッつけろ。怨みある奴等は、どいつもこいつも、最早おれの手中に在る。もう直に予の仕事も終局になる、すれば何處へでも行かれるやうにして遣る。もう少しの間ぢや、従いてゐて奉公しろ。

* * * * *

第五幕

第一場 プロスペロの窟の前。

プロスペロ法服にて、エリエルを従へて出て来る。

プロス いよく仕組通りに進んで来た。術にも破綻なく、精霊もよく命を奉じ、
 「時」も、予が割當て、置いた通りに、事を運んだ。もう何時ぢや？
 エリエ もう直に六時。六時になれば、仕事は終局ぢやといはしやりましたなア。
 プロス さう言うた、最初颯風を起した時分に。やい、精霊よ、王や近侍の者は如何

してゐる？

エリエ お吩咐の通りに、一つ處に押込めて、そのまゝにしておきました。窟の防
 風の、菩提樹の杜の中に、悉皆捕虜にしておきました。王も王の弟も、貴下
 の弟さんも、皆な亂心してゐますから、他の者は狼狽へて歎いてゐます。
 其中でも貴下が君子人のゴンザロとお呼びなされる老人は、茅屋根の氷柱の
 やうな涙をばたくと髭に垂らしてゐます。術が些と利き過ぎました、若
 し今御覽なされたら、可哀さうだと思ひなさらませう。
 プロス 精霊よ、汝は如何思ふ？
 エリエ 若し人間であつたら、可哀さうだと思ひませう。
 プロス 予もさう思ふであらう。あゝ、空気に外ならぬ汝でさへ、彼等の苦しむの
 を見て、哀れと感ずるのに、彼等と同じ人間と生れて、同じ鋭い悲みを味ひ
 得る予が、汝よりも同情が乏しうて何としよう？ 非道にも予を苦しめを

つた其怨は骨髓に徹してゐるが、高尚な理性の勸告に随つて、復讐の念を抑へ、怨みに報ゆるに徳を以てしようと思ふ。後悔した以上は、もう敢て懲しめるにも及ばん。エリエルよ、往つて放免してやれ。予は術を釋いて、彼等を元の通り正氣に復らしてやらう。

エリエ

すぐに引つばつて來ませう。

エリエル 入る。

フロス

(一段聲を高めて) やあ、汝精靈等よ、四方の丘の、四方の小川の、四方の池沼の、四方の杜の精靈等よ、寄せては返る海の浪に戯れながら其眞砂原に、足跡を残さぬ魑魅共よ、かの雌羊すら食まぬといふ味苦き草の輪を月の牧場に裂るといふ尺にも足らぬ精靈等よ、嚴肅な夜半鐘の音を喜び、夜間に菌を醸すことを慰樂にする精靈等よ、われ此年來汝等の幫助によつて、(汝等みづからは何等力量もなきものなれども)、或は眞晝の太陽を暗黒に

し、或は暴逆なる風を呼起して、蒼海と碧空との間に轟きわたる大戦を開始したこともあれば、怖しい霹靂に火燄を興へて、ジョーヅ神の太い逞しい榎の木を、かの神自身の大石斧を以て、眞二つに引裂いたこともあつた。大磐石の巖の岬を震動させたこともあれば、松杉の大木を根こぎにしたこともある。予が號令すれば、幾多の墓穴が口を開いて、そこに眠つてゐた亡者等が、おれの法力によつて、馳走つたこともある。併しながら、此猛しい妖術を、予は今日かぎり、棄てようと思ふ。で、おのし等に或神聖な音楽を奏せしめた後に……それは彼等を正氣に復らせるための呪法なのぢやが……予は此杖を折り、それを幾十丈も下の地中に埋め、それから予の此書を測量鉛の曾て達いたことも無い程の深い海底へ沈めようと思ふ……

莊嚴なる音楽が聞える。

エリエル 先に立ちて王の一群を誘ひつゝ出て來る。すぐ後よ

リアロンゾ 王狂人らしき科介をなしつゝ、出る、ゴンザロは泣く
 く、それを介抱して出る。つゞいてセバスチャンとアントニオ、こ
 れも同様の有様にて、アドリヤンとフランシスコとに介抱されて
 出る。これより先、プロスペロは魔法杖を以て地上に大きな
 輪を畫くことあり。三狂人は此輪の中に歩み入ると同時に
 呪縛されて佇立する。それを見てプロスペロ口を開く。

莊嚴な音楽ほど亂れた心を慰めるに適したものは無い。頭の中で幾ら煮
 沸つても何の役にも立たぬお主の其脳髓が、どうか此音楽で治るやうに！
 さうして突立つてゐなさい、呪縛が懸つてゐるから、所詮動かれはせん。
 ……君子人のゴンザロよ、お前が泣いてゐるのを見ると、つい同感して、予
 の目からも涙が落ちる。……呪縛が見てゐる間に釋ける。恰ど朝の光りが、
 夜の暗を漸次溶しつゝ、忍び寄つて来るやうに、回復しかけた正氣が、朗か

な理性を掩うてゐる無明の雲霧を逐ひ拂ひをる。……あゝ、予の爲には恩
 人、その君には忠臣のゴンザロどの、今に舊恩を謝しますぞ、口でも、また行
 爲でも。……残忍に我々父子を取扱うたアロンゾどの、その後援はお主の
 弟のセバスチャンぢや。……やい、セバスチャン、その報いが來たのぢや
 ぞ。……骨肉を分けた眞實の實弟、おのれ、非道の大望を抱いて、慈悲をも人
 情をも抛擲して、そのセバスチャンと謀し合せ、……それが爲に彼奴は一段
 と良心の苛責を受けるのぢや。……こゝで王を殺さうとしをつた。非道な
 奴ではあるが、予は汝をも赦してやる。……だんく分別が戻つて來るら
 しい。溷濁してゐる彼等が心の岸頭に、今に理性の上潮が打寄せるであら
 う。まだ一人も予を見ん、氣が附かぬらしい。……エリエルよ、窟へ往つ
 て、帽子と劍を取つて來い。(エリエル入る)。此衣服を脱いで、ミラン公爵の昔
 の姿を現さう。……(窟の方に向ひて) 精靈よ、速く。もう直放免してやる。

エリエル命ぜられたる帽子と剣とを携へて、下の歌を口ずさ
みながら出て来り、プロスペロを助けて衣裳を著更へさせつ
ゝ歌ふ。

エリエ

(歌ふ)。

蜂と一しよに花の蜜吸うて、
九輪ざくらの酒盞に臥てゐて、
臥床で鼻の啼くのを聞かう。
大蝠蝙蝠の脊中に乗つて、
夏の後追うて、愉快にくく、
愉快にくく、これから暮を、
枝を垂れてゐる其花かげで。

プロス

さう、それでよい、うい奴ぢや!

汝が居なくなると、困るであらうが、併し



暇を遣る。さうく、それでよい。……さ、
王の本船へ、その見えぬ姿のまゝで。……船
底に水夫共が熟睡してゐる、船長と水夫
長は、目を覺してゐようから、こゝへ引つ
ぱつて来てくれ。よいか、今直に。
エリエ 風を切つて飛んで往つて、脈が二つとは搏
たんうちに戻つて来ます。

エリエル 急いで入る。

ゴンザ 有る限りの苛責や苦痛や不思議や驚駭が、
此處には存在してゐる。何神かのお力を
以て、何卒此怖しい島から私共をお救ひ
出し下さりませ!

ブロス アロンゾ王よ、虐待されたミランの公爵ブロスペロを御覽なさい。わたしは生きてゐるといふ證據に貴下を抱きますぞ。さうして御一同を眞實に歓迎いたします。

アロン 全く其人であるのやら、又は先刻以來吾等を誑す怪しい者であるやら分らんが、お前さんの脈は、どうやら生きてゐる人のやうに搏つてゐる。お前さんに逢うてからは、心の悩みが薄まりました。わしは氣が狂うてをつたらしい。若しこれが夢でないならば、不思議な由來のあることに相違ない。貴君の所領地は悉く返却致して、此方の舊惡を宥恕せらるゝやう願ひます。……が、どうしてブロスペロどのが、存生せられて、こんな處にはをられるか？

ブロス (ゴンザロに) まづ第一に、御老人よ、お前さんを抱きます、現世に類のない君子人。

ゴンザ 夢とも現ともわきまへかねます。

ブロス 先刻手品料理を美味つたので、其癖が脱けきらぬと見えて、實物を見せても信用なさらん。……どなたもようお出でなされた。……が(セバスチャンとアントニオに) お前たち二人の衆は、わしの料簡次第で、叛逆人たるの證據を擧げて、王の逆鱗を招かせることも出来るが、今は黙つてゐてやる……

セバス (傍白) ありや惡魔が言つてるのだ。

ブロス ……今は。……(更めてアントニオに) 汝は、弟と呼ぶさへも舌の穢と思ふ程の非道人ぢやが、汝の甚しい罪惡をも赦してやる……悉く。で、予の所領を返せ、否とはいはさぬぞ。

アロン 貴下がブロスペロ殿であるなら、存生せられた仔細を、どうしてこゝで目に懸ることゝなつたかを、お話し下さい。吾らは、二時間前に此濱邊で難船して、貴重の伴を亡ひました……思ひ出すたびに苦痛の種でござる！

ブロス それはお氣の毒なことぢや。

アロン とりかへしの附かぬ損失で、忍耐の神の力を以ても、逆も此心の傷れは癒しがたうござる。

ブロス いや、多分忍耐の神の助けを、まだ十分にはお求めなさらぬのであらう。

アロン わしはそれと同じやうな経験を、忍耐の力で慰めてゐます。

ブロス え、貴下も同じやうな経験？

アロン 恰ど近頃、恰ど同じやうな。さうして、其大きな不幸を堪へ忍ぶ方便は、すつと貴下よりも乏しいのぢや。わしは女兒をなくしました。

ブロス え、娘御を！ やれく！ あゝ、二人を生かしておいて、ネーブルスの王妃に仕つかつた！ まゝになるものなら、わたしが伴に代つて海底の藻屑になりたかつた。……何時娘御をお亡しなされた？

ブロス つい先刻の大あらしで。……

ゴンザロを はじめ一同が尙茫然としてゐるを見て、最初はアロンに、次に一同に向ひて

諸卿は此邂逅に驚いて、分別力を失ひ、おのが目の働きの眞偽をさへも疑ひ、自身の言葉をも實の聲でないやうに思うてをられるらしいが、お前さんがたの神經は如何なつてゐようと、わしは間違ひなくブロスベロぢや、ミランから曾て追放された其公爵ぢや。不思議にもお前さんがたが難船せられた其同じ岸邊に上陸して、此島の主人となつたのぢや。……が、此話は、ま、後廻しにしよう。これは日を續いで話すべき事柄で、逆も朝餐時の話ではない、又逢ふや否や語るべき事でもない。……（アロンに）ま、ようこそ。此窟がわしの宮殿、近侍とても、ほんの一人か二人、臣民と稱するものは一人も無い。窟内を御覽じて下さい。わしの領分を返して下さつたから、善い物をお報いに獻じます。少くとも、わしが満足したほどに貴下

が満足なさるべき不思議の物を御覽に入れませう。

窟の入口が開くと、奥にファイダイナントとミランダとが睦じげに将棋を玩んでゐるのが見える。

ミラン あれ、いけませぬ、貴下は欺騙をなされます。

ファイ とんだことを、決して全世界が貫へても、欺騙などはしません。

ミラン 世界が取れるものなら、欺騙しをなされてもよからうと思ひます。

アロン (駭き呆れて) あゝ、これもまた此島の幻象であるのなら、貴重の伴を二度目なくする悲みを見ねばならん。

セバス 實にどうも不思議な事だ!

此中にファイダイナント等も心附きて此方を見る。

ファイ 威しはしても海は存外情深い、わたくしは故なく海を呪うてゐました。

ファイダイナント進み出で、父王の前に跪く。

アロン 喜ぶ父親の祝福の有る限りを以て其方の身邊を圍繞せしめん! さ、起つて、どうして此處へ来たかを話さない。

ミラン まあ! 不思議な! おゝ、まあ多数の立派な生類! 人間といふ者は、まあ、何たる美しいものぢや! かういふ人達の住んでゐる處は、まあ、何といふ見事な、新奇しい世界であらう!

ブロス さやう、其方には新奇しからう。

アロン 其方と今遊んでゐたあの娘は何者ぢや! 上陸後の知交なら、三時間とは經たぬ筈ぢやが、あれは吾々を引離したり、一しよにしたりした女神でもあるのかり!

ファイ 父上、あれは人間でござります、が、神の攝理に任せて私の妻にいたしました、私は、父上の御意を拜承ることの出来ぬ場合に、いや、父上を御存生とも信じかねました際に、あれを妻に擇びました。すなはち、豫て屢々其

名は聞きながら曾て對面はしませなんだ元のミラン公爵の姫君なのでござります。そのミラン公の爲に私は一命を助けられ、此姫の故に公爵をば父と呼ぶのでござります。

アロン では、わしはその姫の父となる理ぢやが、あゝ、何といふ逆さま事ぢや、親子に詫びねばならぬわ!

ブロス ま、暫く。過ぎ去つた事などを思ひ出して、お心を苦しめなさるな。

ゴンザ 獨り心中で泣いてをりましたので、つい口をば能い開きませなんだ。あゝ、神々よ、何卒此お一方の頭上に幸多き寶冠を下させられませい、私共をこれへ導かせられましたは尊神達でござります故に!

アロン アーメン! ゴンザロよ、わしも祈り添へまするぞ。

ゴンザ あゝ、ミラン公が嘗てミランから流され人になられたは、つまり其御子孫がネーブルス王となられる爲であつたか? おゝ、並々のもでたさ以上の

此お慶び! 純金の文字を以て、不朽の石の柱に斯う刻附けさせませう。……「これはさる船旅の出来事なり、姫クラリベルはチュニスにて良縁の夫を得、兄のファードイナンドは溺死をまぬがれて良き妻を得たり又ブロスベ

ロは孤島に在りて公領を復し、吾等一同は、一たび吾を失ひけるが、やがて又吾を復しぬ。」

アロン (ファードイナンドとミランダに) 手をお貸し。お前がたの幸福を願はざる者には、

天よ、悲みを下したまへ、悩みを下したまへ!

ゴンザ 何卒その通りに! アーメン!……

エリエル、船長と水夫長とを誘ひつゝ出て来る。二人は茫然として、驚き呆れたる體にて従いて出る。

おゝ、あれを御覽なされ! あれへ又お船の者共が参りました! 果して手前が豫言いたした通りでござります、陸に絞罪臺のある限りは、あいつ

め海で死ぬやつではござり
ませんで。……やい、罰當りの
口悪男め、甲板ではさんぐ
の悪口を並べをつたが、陸で
は其口が開けられんか？…
…何の報告ぢや？

水夫長
へい、第一等のお報告は、王さま
ま始め御一同が御無事とい
ふ事でございます。其次は、
つい三時間前までは、毀れた
とばかり思つてをりました
御本船が、はじめて乗出しま



した時とおんなじに、堅固で活潑で、網具一つ不足してはゐないといふこ
とでござります。

エリエ (アロスベロに傍目) みんな私がしたのでござります。

ブロス (エリエルに傍目) 器用な奴ぢや！

アロン
どれもこれも、尋常普通の事ではないわい。いよく出でていよく不
思議ぢや。……こりや、汝らは如何してこゝへ来た？

水夫長
起きてゐたのなら詳しくお話し申すのでござりますが、死んだやうに寝込
んで(どうしてだか存じませんが)みんな艙口下へ叩き込まれてゐました
のでござります、ところが、つい今がた、唸るやうな、叫くやうな、吠え
るやうな、かと思ふとチャラン／＼と鎖が鳴るやうな、いろんな騒々しい、
おそろしい物音が聲えましたので、目を覺しますと、すぐに身體が自由に
なりました。見ると、御本船は、もとの通り何の故障もなく立派になつて